

自然体験活動指導者による  
効果的な  
放課後活動の取り組み

平成20年3月

NPO 法人 自然体験活動推進協議会



# 目次

## 事業報告

宮城県	_____	1
・ 茨城県	_____	7
神奈川県	_____	13
・ 山梨県	_____	19
・ 長野県	_____	25
・ 愛知県	_____	31
・ 岐阜県	_____	39
・ 佐賀県	_____	43
・ 長崎県	_____	49
・ 沖縄県	_____	55



## 宮城県

### (1)事業概要

平成18年度まで行っていた子どもの居場所事業で培った活動を中心に、地域の子どもと大人の交流を図り、地域の自然や伝統文化などを体験することにより、子どもたちの放課後がより充実して過ごすことを目的にしている。また、地域の人材発掘や諸団体との連携を図る。

#### 事業の特徴

身近に自然が多い地域性を生かし、自然体験活動を中心に、季節の行事を取り入れる。また、実施場所の児童センターという特性を生かして、異年齢のこどもたちがスムーズに交流し、多くの子どもたちが遊びを通して様々な体験ができるように配慮し、地域のご年配の方との交流も行う。

#### 事業の独自性

児童センターという体育的な活動を取り入れている施設なので、自然体験だけでなくトランポリンなどの運動遊びや子どもたちが主体的に継続的に取り組めるように、楽天のチアガールズの踊りをした。また、雪遊びを取り入れ、古民家の囲炉裏を囲んでの民話の語りを聞く活動を取り入れている。

#### 実施日・時間帯

子どもたちの学校からの帰りが早い、月・水を中心に、親子のふれあいが図られるように、土曜日と日曜日の活動も取り入れた。時間帯としては、冬、日が短くなることを考慮して、14時から16時の2時間のプログラムを行った。

#### 実施場所について

小学校に近隣にあること、地域の拠点としての活動を行っていること、子どもの自由な遊び場であることを踏まえ、児童センターを活動場所とした。

また、近隣の公園、古民家がある国営みちのく公園も利用した。

#### 参加者数

子ども 512人、大人68名

ボランティア・スタッフ人数

ボランティア 43人、スタッフ 54人

#### 募集・広報について

基本的に、チラシを地域の小学校に配布。児童センター・市民センターにチラシの掲示と利用者への配布を依頼する。

#### 参加費

基本的には参加費は無料。焼き芋のときのお芋代とかの実費負担はしてもらっている。

#### その他

児童センター内で活動するときは、基本的に申込みをとらず、遊びに来た子で興味を持った子は、だれでも参加できるようにした。

## (2) 放課後活動事業のプログラムについて

### ① プログラム内容

月	プログラム内容	写真
9月	10. 公園散策とパズル遊び 12. トランポリン 22. ネイチャーゲーム 26. 公園散策とお話	
10月	3. 鬼ごっこ・かくれんぼ大会 14. ネイチャーゲーム 17. トランポリン 28. ネイチャーゲーム	
11月	6. 焼き芋 14. チアリーディング 21. トランポリン 26. 公園散策・なわとび 28. チアリーディング	
12月	1. 親子ドッジビー大会 2. ネイチャーゲーム 3. 自然物のクラフト 10. Wダッチ 11. 公園探検 12. チアリーディング 15. お楽しみ会	
1月	8. 公園探検・小正月飾り 23. トランポリン	
2月	2. スポーツチャンバラ 3. ネイチャーゲーム・民話 6. トランポリン 20. 自然物のクラフト 27. 独楽回し	

プログラムの内容として、子どもが飽きずに活動できるように、静的な活動と動的な活動を合わせて行うように心がけてプログラムを構成している。

児童センターの大型トランポリンを借りてトランポリンで遊んだが、その後も、子どもから「トランポリンがやりたい」という希望が多かったため、子どもたちの希望や意見を反映させて、月1回、トランポリンを取り入れることにした。

また、子どもたちが目的を持ち継続して取り組むことも必要と考え、宮城県のプロ野球チーム楽天イーグルスのチアリーディングの方に指導を依頼し、児童センターの行事で発表できるように、チアリーディングの練習を取り入れたことにより、子どもたちが主体的にそして継続的に来るようになった効果が見られた。



季節の行事を取り入れ、自然との関連や伝承遊びのコマを取り入れた。例えば、雪の遊びも取り入れ、雪遊びをした後は、古民家の囲炉裏を囲んで、民話を聞いたりした。

地域の大人にも、この事業を知ってもらうため、親子参加のプログラムを組み、大人にも参加し、さらに、この事業に手伝ってもらえるように、声掛けをした。

## ②プログラム考案・実施の留意点

- ・子どもたちが、身近な自然に目を向けられるように、通学路の自然探検をしたり、すぐ近くの公園に散策や探検に出かけたりして、日常的に、身近な自然に目が向けられるように考えた。
- ・自然の中で見つけたものなどを利用して、クラフトを行った。
- ・自然と地域の伝統行事がつながるように考えた。小正月飾りの木は、子どもたちと公園探検に出かけて見つけた、みずきの枝を使用している。

## ③地域の団体との協働・連携について

- ・この行事を行うにあたり、チラシの配布など小学校と連携がとれるようにしている。
- ・市民センター・児童センターにチラシを掲示してもらうなど、広報の協力を得ている。また、市民センターには、地域の人材情報や市民センターで育成したボランティアさんにお話を聞かせてもらったりして連携を図った。
- ・仙台のプロ野球球団である楽天イーグルスのチアリーディングに指導を依頼し、今後も連携がとれるようになる、きっかけづくりができた。
- ・民話の語りのボランティア団体との協力をもらい、プログラムの充実を図ることができた。

### **(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について**

- ・市民センターからの情報をもとに、こちらから電話連絡をしたりして、活動場所に来ていただけるように積極的に働きかけている。また、市民センターで育成しているボランティアさんの実践の場として、児童センターを利用してもらったりしている。
- ・児童センターを拠点に活動しているボランティアさんに、児童センターから話をしてもらい、活動の協力をもらった。
- ・学生さんにきてもらえるように、近くの短大にボランティア募集のポスターを掲示してもらった。
- ・指導者は、日ごろ、一緒に活動している仲間を中心に、それぞれのスタッフの知り合いに声をかけてもらい、指導者の幅がひろがるように、心がけた。
- ・クラブトなど、必ず、事前研修を行っていた。
- ・自然体験活動プログラムの情報提供や打合せを十分に行った。また、役割分担など明確にし、スタッフがやる気をもって、取り組みができるように考えた。

### **(4) 安全面への配慮について**

- ・事故や怪我がないように、安全管理に気をつけた。下見は、よく知っている場所でも必ず、事前と当日行うようにした。移動する場合は、交通事故に気をつけるため、安全な道を歩くようにした。
- ・参加者の所在の確認を絶えず行い、スタッフの目が届くように、スタッフの打合せを十分に行った。
- ・寒い日がかかなりあったので、風や雨がしのげる場の確保をし、子どもたちが風邪をひいたりしないように体調をみたりと健康管理に留意した。
- ・親子での参加の場合、大人の方もけがをしないように配慮した。
- ・安全確認はひとりで行うのではなく、スタッフ全員で行うようにした。

### **(5) 参加者、指導者の感想など**

#### **【参加者の感想】**

- ・「チアリーディングを何回も練習して、お楽しみ会で発表できたのがうれしかった。」
- ・「ここまで、こどもができると思わなかったので、発表をみて感動しました。ぜひ、来年もやってください」(チアリーディングの発表をみた親からの感想)
- ・「たくさんの自然があるのもわかった。もっと、いろいろなものを見つけないか」
- ・「木の枝の顔が、かわいかった」
- ・「トランポリンが楽しかった。ふわふわして鳥のように飛びたいと思った」
- ・「親子でのんびり過ごすことができました。時間も長いかと思いましたが、気がついたらアツという間でした」
- ・「囲炉裏でお話を聞く体験が新鮮でした。何度も訪れている公園なのに、古民家の中でお



話を聞いたりすることができることを知りませんでした」

#### 【指導者の感想】

- ・「雨天のため、急遽、トランポリンを取り入れたが思った以上に、子どもが喜び、トランポリンを楽しみにしているのがわかった」
- ・「雨や雪などの天候が悪い日もあり、子どもが寒がったりしていたので、室内活動を準備していい良かったと思った。」
- ・「小正月飾りづくりで、この時期、みずきの枝が赤くきれいなのがわかった」

### (6) 本事業の成果、今後の課題

子どもの居場所である、児童館の協力を得られたことは、すでに子どもの居場所として、異年齢の子どもたちや地域の年配の方との交流のノウハウを持っているので、そのあたりの活動がとてもスムーズに行うことができた。回数が増えれば増えるほど、児童館のもっている力に助けられ、子どもたちが主体的に継続して行うことができたように思える。

また、この事業を行うことにより、地域の諸団体との交流を持つことができたことは、大きな成果である。地域の住民や関連団体が連携をとることは、地域社会で子どもを見守り育てていくために、とても大切なことであると考えられる。また、定期的に事業を行うことにより、子どもの期待や持続性を養うことができたと思える。

放課後の子どもの居場所だけではなく、地域の活性化や地域力の向上につながるように考えられる。

課題としては、プログラムがマンネリ化しないように、いろいろな分野の体験をさせるように考えることが大切な要素になってきている。今回、基本は、自然体験活動を中心に、この事業を考えてきたが、地域の人材を発掘することにより、自然体験だけを無理に行うのではなく、柔軟にその人のもっている力を引き出すことも大切であり、自然体験活動と他の活動のつながりをつけていくことが今後の課題になっている。

また、お父さんを子育てに巻き込んで活動を行うことがもうひとつの課題と考えられる。

### (7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて

来年度以降、継続的に行うためには、学校との連携を深め、地域住民や関連諸団体との連携を行えるように、連絡を密にとることも必要だと感じている。

放課後子どもプランを行うにあたって、野外の体験活動も大切を中心に活動をしているが、やはり雨天時など、活動が行えるような場所の確保も安定的に継続して行う上では、大切なことだと感じている。ただ、子どもの居場所を提供するだけではなく、子どもも含めて、人材育成も視野にいれて活動を行うといいのではないかと考えている。

自然体験活動指導者による効果的な放課後活動の取り組み

## 茨城県

### (1)事業概要

茨城大学ネイチャーゲーム研究会は、平成16年度からCONE地域子ども教室水戸市茨城大学会場を主管してきた。これまでは大学構内や近くの公園で自然体験的な遊びを提供してきたが、今年度は大塚池公園にて、より環境教育を意識した内容で開催してきた。

水戸市は大塚池の水質改善に取り組んでいる。今年度、水戸市の大塚池水質浄化事業を茨城大学教育学部の研究グループが受託した。本会場のコーディネーターも研究グループの一員である。この事業は住民参加の取り組みも求めている。この住民参加の取り組みという課題と「放課後子どもプラン」を組合せ「大塚池探検隊」がスタートした。

#### 実施日・時間帯

実施日：平成19年10月14日から平成20年2月24日までの毎週日曜日

時間帯：午前10時から12時まで

#### 実施場所について

大塚池公園（茨城県水戸市）

大塚池は水戸市市街地西部にある池。一周約2.5km。溜池として利用されてきた。現在周囲は住宅地になっている。池の周囲の遊歩道を散歩したりジョギングしたりする人も多く、付近住民の憩いの場でもある。冬になるとハクチョウやカモがたくさん飛来する。天気がよい日には、えさをやりに来る人や写真を撮りに来る人でにぎやかになる。

#### 参加者数（のべ人数）

子ども：38人、大人：21人

#### ボランティア・スタッフ人数

16人

#### 募集・広報について

募集・広報は主にチラシによった。活動開始前後は水戸市内の公民館、図書館に学生がチラシを持参した。次第に学校での配布依頼をひろげ、活動終了時には大塚池近隣の小学校5校と茨城大学教育学部附属小、附属中で配布を依頼した。11月中旬には活動を紹介するブログを始め、そのURL、QRコードもチラシに記載した。

#### 参加費

無料

#### その他

後援：水戸市教育委員会

## (2) 放課後活動事業のプログラムについて

子どもたちと保護者も参加しての水質調査を活動の柱（4週間に2回）とした。その間の日曜日に、大塚池の環境について、楽しみながら学習できる活動を工夫してきた。同じプログラムで2週ずつ開催し、都合の良い週に同内容を体験できるように配慮した。以下、プログラムごとに概要と考案・実施上の留意点について記す。

### ●エコマップを作ろう（10月14日、21日）

これは、まず大塚池周辺から知るという目的をもったもので、大塚池探険隊という名前に沿って計画したものである。周辺の探索から歩きながらコミュニケーションをとって参加者との距離を近づけ、一緒にエコマップを作るという内容であった。

このアクティビティを計画するにあたって気をつけた点は、子どもたちに途中で飽きられない様にするという点である。そこで、参加者一人ひとりにワークシートを使ってもらうことで自分だけのエコマップを作り、大きな模造紙にみんなで書き合っってひとつエコマップを作ろうとした。この時大きなエコマップは2週に渡って開催されるので半分ずつ作ることにした。また、参加者が幼かった場合も考え、その場合はゲーム性の高い要素を取り入れる準備はしていた。エコマップを作る上でポイントになる様な場所のいくつかを目印を置き、見つけていくというもので、あった場所の様子をワークシートに書き込むことでエコマップ作りを楽しみながらやろうと考えた。またこの場合、ゲームに集中しすぎない様に隣に大学生をつけセーブするという事を事前に決めていた。

### ●ネイチャーゲームで秋を感じよう（11月11日、18日）（以下一部でNGと略記）

1回目は、ネイチャーゲーム（フィールドビンゴ、木の葉のカルタとり）、2回目は、木のバッジ作り、ネイチャーゲーム（はじめまして、カモフラージュ、めざせ名探偵、わたしの木）を行った。1回目は、幼児や大人でも出来、NG初心者でも取り組みやすく、参加者数が少なくても出来るように「フィールドビンゴ」を選んだ。さらに紅葉と落ち葉の季節を実感できるように「木の葉のカルタとり」を取り入れた。

2回目は、前回の参加者と新しい参加者が来ることを想定し、またフローラーニングを意識して第1段階～第3段階まで順に体験できるように考えた。やはり、幼児や大人、NG初心者でも取り組みやすく、参加者数が少なくても出来るように考慮した。まず参加者同士が打ち解けられるように、自己紹介を兼ねて、バッジ（名札）作りと、第1段階のアクティビティとして「はじめまして」を選んだ。次に、第2段階のアクティビティとして「カモフラージュ」を取り入れた。そして効果的に木に関心を持ってもらうために、第2段階の「めざせ名探偵」、第3段階の「わたしの木」と、木に関するアクティビティを続けた。

### ●透視度計を作ろう（12月9日、16日）

事前に、必要な部品を切りそろえ、プラスチックパイプの片端から2cmの側面に、はんだごてで穴を開けておく（ガラス管がはまる程度）。①パイプにメジャーを透明テープで固定する。②ガラス管を、事前に開けておいたプラスチックパイプの穴に、接着剤で固定す

る。③プラスチック板に透明テープで指定の紙を貼り付ける。④③のプラスチック板を、ガラス管を取り付けたパイプの端に接着剤で取り付ける。⑤ガラス管にビニルホースを取り付ける。

留意点:①でメジャーが曲がらないようになるべく2人で行う。②で接着剤を付ける時に、ガラス管の穴をふさがないように気をつける。また、パイプにさす時に、奥に取り付けられない。二重十字が隠れてしまうので。

使い方:パイプに水を入れ、のぞき込みながら、ホースで水の量を調節する。二重十字の中の口がはっきり見えるところで水の量を一定にし、その時の水位を測る。

### ●発見・体験! 渡り鳥 (1月6日、13日)

大塚池は、白鳥などの渡り鳥にとってなくてはならない越冬地である。そのため、秋～春にかけてたくさんの鳥で賑やかになる。また、たくさんの人が大塚池公園を利用している。しかし、大塚池公園には来ていても、池の鳥とのかかわりといえばパンなどの餌を与えることくらいである。そこで、もっと渡り鳥について知ってもらうこと、大塚池に目を向けることを目的としてプログラムを考えた。

内容は①アイスブレイクとして、鳥に関するエピソード発表、②鳥に関するビンゴゲーム、③鳥のぬり絵、④渡りはつらいよという流れである。2週目には、双眼鏡を用いて鳥を観察する時間を設けた。

普段鳥を見ているようで実はきちんと見ていない。そこで、これらの活動を通して鳥をよくみて観察し、さまざまな視点から鳥を見ること、参加者が観察した鳥の特徴習慣や動きなどにきづくことができるようにした。また、プロジェクト・ワイルドの渡りはつらいよの活動を通して、渡り鳥の視点に立つことで、私たちの行動を見直しどのように渡り鳥と接していかなければならないのかについて考える機会になること、そこから行動に移すことができるようになることを期待される。

### ●ネイチャーゲームで春を見つけよう (2月3日、10日)

ノーズ、カモフラージュ、木の鼓動、森の美術館、明日への手紙をプランに組み入れた(全てNGのアクティビティを参考にした)。A. ノーズ:大塚池バージョンのヒントカードをオリジナルに作成した。用いた生き物はハクチョウ、コクチョウ、マガモ、ブルーギル、パンジー、チューリップの6種類。これらを使用し、ヒントから何の生き物かを当てていく。B. カモフラージュ:コースにセットされた人工物(冬場に見られる茶色系のものと、見られないカラフルなもの)を見つけていく。C. 木の鼓動:聴診器を用いて木の中から聞こえて来る音に耳を傾ける。D. 森の美術館:春らしいと思ったものに、さまざまな大きさの額縁を乗せて囲み、タイトルをつける。後にみんなで鑑賞し、写真に残す。E. 明日への手紙:体験したことを振り返り、葉書に絵日記を書いてもらう。それにDの写真などを入れ、4月頃に投函する。

留意点:Aでアイスブレイク、Bでは冬を感じ、Cで冬の厳しい寒さに耐えながらも生きている木の様子を観察し、Dでは春を探しに行き、Eで春に思いをはせるといふ狙いを置いた。

Dで、春が見つからないという状態に陥らないよう、フィールドをよく観察しておく。Eで住所を書いてもらう必要があるので、あらかじめその旨を伝え了承を得てから活動を行う。

●パックテストで水質調査をしよう（上記以外の開催日、合計10回）

水質調査として大塚池の湖内6地点、流入2地点、比較のための水道水のCOD、アンモニア態窒素、硝酸態窒素の測定を、パックテストを用いて行った。また途中透視度計を作っただけからは透視度の測定も加えて行った。測定終了後にそれぞれの項目についての簡単な説明や、測定で得られたデータからわかることなどを説明した。

測定項目が多く結構時間がかかることから、遠くの地点は先に採水しておき、子供達と一緒に採水するのは近くの地点だけにして時間短縮をはかった。また、パックテストを使う時にはパックテスト内に半分くらい水を入れる必要があるが、それがなかなか難しいため、先に使い終わったパックテストで練習してもらってから測定してもらうようにした。

パックテストによる測定は簡単にできるため、測定頻度と調査地点を多くして、時間の経過による水質の変動や湖の場所による水質の違いを詳しく見られるようにした。また、採水する時はなるべく岸から離れて行った方がいいので、調査地点には湖の中心のほうに少し出っ張っている所を選んだ。測定項目としては、一般的な湖沼の指標であるCODの他に、湖沼の一番の問題である富栄養化にも言及するために栄養塩類の中で一番多く含まれる硝酸と、し尿などに含まれ子供達でも聞いたことがあるであろうアンモニアを選んで測定することにした。

### (3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

活動内容には、研究グループ教員の指導を得た。コーディネーターが本務で立ち会えない開催日には、みとネイチャーゲームの会の会員に協力を依頼した。

指導者（スタッフ、ボランティア）は基本的に茨城大学 NG 研究会の学生である。透視度計作成の回には、研究グループ教員のゼミ学生の協力を得た。

指導者育成は茨城大学教育学部のカリキュラムに加えて、課外活動及び各種講座により行っている。学内で開催する NG リーダー養成講座、プロジェクト・ワイルド、プロジェクト WET のエデュケーター講習会を希望に応じて受講し、立案・指導に役立てている。

### (4) 安全面への配慮について

前述の NG リーダー養成講座には、危険予知トレーニングの時間がある。それを受講した上で安全に配慮してプログラムを立案している。パックテストの扱い方を練習させるなど、活動に付随する危険はその都度注意しながら実施してきた。万一の場合も、本開催場所は消防署に近く、活動場所付近まで自動車が入れ、散歩の人の協力も期待できる。

## **(5) 参加者、指導者の感想など**

### **【参加者の感想】**

子ども：「よくわからなかった。」「ネイチャーゲームもう終わり？またやろう。」「楽しかった。」「今度は一輪車がしたい。」

保護者：「鳥や自然など、普段見ているようで見ていないのだな、と感じた。（鳥のぬり絵をしようとしたら、色などきちんとわからなかったことから）」「具体的に水質調査の方法がわかってよかった。」「子どもの興味に答えてくれる大学生などの指導者がいると助かる。」「水質調査で COD の数値が高めだった地点は、普段通ったときに臭いがすると思っていた場所だった。」

### **【指導者の感想】**

「活動内容（活動の中で参加者にやってもらうこと、作業など）と、学校で習ったことを結びつけると、子どもはより積極的に取り組んでくれる。」「NG に興味を持っていた子どもは、水質調査など対象年齢が高めの活動に興味を持つことは難しいようだった。しかし水質調査に興味を持って参加する子どももおり、結果、対象となる子どもの幅が広い活動になっている。」「参加する子どもが少なかったが、参加してくれた子どもたちと仲良くなれたのが一番大きい。そういう意味では子どもの居場所がつくれたのではないだろうか。」「水質調査だけで終わらずに、その結果から、環境（汚染）状況を実感してもらうところまで子どもたちの思考が至るようにこちらの指導が必要だ。」

## **(6) 本事業の成果、今後の課題**

公園で水質調査をしていると、多くの方々と交流することになる。かつては水を抜いたという話。水を抜くと鳥が困るのではないかという話。近くに炭焼き小屋があるという話。山林を造成して流れ込む水が減ったという話。そうした話を集めて、多面的に考え合わせたいけるようになれば、持続可能な開発のための教育(ESD)になっていくだろう。

## **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

来年度以降は開催頻度を下げ、活動を続けることを考えている。学生団体にとって（顧問教員であるコーディネーターにとっても）、毎週一回以上の開催は無理を感じる。持続可能な開催システム作りが課題である。

自然体験活動指導者による効果的な放課後活動の取り組み



## 神奈川県

### (1)事業概要

本事業は、おもに海を舞台に地域の小学生を対象に実施した。子どもが外で遊ぶ時間が減った今、自然に触れ体を動かすことの大切さが注目されている。加えて地域の未来を担う人材育成という視点から、地域の自然資源、社会資源を生かし、次のねらいで実施した。

- 1) 自然の「楽しさ、面白さ、大切さ」を季節ごとの多角的な体験で体感、会得する
- 2) 地域の漁業者、里山の保全や伝承活動団体などを講師に招き、地域理解に役立てる
- 3) 安全管理体制のもと、子どもの感性と自主性を重んじ、自ら発見し考える力を養う

実施場所は、プログラムごとに異なる。9月には泳いで海中観察。10、11月は舟を漕いで海上を行き、葉山漁協の協力によるワカメの種付け体験は漁港で実施した。12月と2月は海岸を歩き、漂着物と海藻に焦点を当てた。1月には海とつながる山と川を探訪している。

**実施日・時間帯**

土曜日と日曜日が基本。

9月	10月	11月	12月	1月	2月
8、9、15	13、14、20、27	11、17、23	8、9、15	19、20、26	9、10、16

実施時間：各回ともに10：00～15：00。ただし、11月23日のみ10：00～12：00。

新規参加クラスを2組、継続参加クラスを1組設けた。それぞれ開催日を変えて実施したが、11月23日の漁業体験は、親子参加のプログラムとして全クラス合同で実施した。

**実施場所について**

神奈川県葉山町は三浦半島の付け根、相模湾側に位置する。東に照葉樹の低山を配し、西には南北4キロにわたり「日本の渚・百選」に選ばれた磯と浜が交互に続く。ホテルが住む清流、森戸川と下山川は、照葉樹の森に源を発し棚田を潤して葉山の海に注いでいる。

明治期に御用邸が設けられ、保養と別荘の町として知られるようになった。日本のヨット発祥の地であり、海のレジャーがさかんな観光地でもある。東京から50キロ圏内にあり、宅地開発や核家族化が進んでいる。ワカメ養殖や小規模な沿岸漁業、ブランドの葉山牛ほか農業など、第一次産業の営みも残されているが、伝統文化や食文化は消滅しつつある。一方で、海あり山あり里ありの自然環境を楽しみ、保全を考える市民活動が活発なのも特徴だ。豊かな自然が備える「場のちから」がひとびとを引きつけているといえる。

**参加者数**

すべて小学生。新規参加クラスは15～20人。継続参加クラスは25～30人。

**ボランティア・スタッフ人数**

スタッフ数：各回4～8人。プログラムリーダー、サブリーダー、記録はスタッフが担当。

ボランティア数：各回8～15人。

**募集・広報について**

①NPO 法人オーシャンファミリー海洋自然体験センターのHP、地域広報誌、町内掲示板、自然体験活動関連のメールマガジンなどにより、広く募集の告知を行った。②告知を

ふまえ、説明会を開催した。

参加費

新規参加者は1回4,000円。継続参加者は5,000円。別途、全参加者共通で、器材消耗品及び管理費として年会費5,000円。

**(2) 放課後活動事業のプログラムについて**

活動一覧

月	テーマ	内容
9月	スノーケリング	魚の生態や海中の様子をじっくりと観察 見つけた生き物のリストを作る
10月	いろんな舟を漕ごう（カヤック、ロウボート、伝馬船、手作り田舟ほか）	動力を使わない舟を楽しく漕ぎ、特性を知る 70代漁師「修一丸」の指導で櫓漕ぎも体験
	セーリングカッター（ディンギーヨット）の操船体験	風を動力とした舟を操作し、特性を知る 帆の操作を協力して行い、帆走させる
11月	クルーザーヨット乗船体験	風を動力としたヨットに乗り、特性を知る NPO法人葉山ヨットクラブの協力で実施
	ネイチャーハイキング	森戸川の河口から中流、上流まで歩く 海につながる自然の循環に視野を広げる
	ワカメ種付け体験	親子参加型のプログラム。葉山漁協の協力で、自然と人間の係わり、地域産業、食を学ぶ
12月	ビーチコーミングとクラフト作り（キャンドル、クリスマスリース）	漂着物の多彩さを楽しみ、漂着ゴミに気づく 拾った漂着物を使って作品作り
1月	ネイチャーハイキング	三ヶ丘を歩き、森の面白いものを発見
	山の知恵伝承と焚き火で焼き芋	市民団体「森戸川村」の協力で、山を散策 森林利用の知恵について学び、焚き火を体験
2月	海藻の観察と海藻おしば作り	海岸に打ち上がった海藻と磯の海藻を観察、多様な種類や生態を学ぶ。おしば作品を作る



9月 スノーケリング活動風景



10月 色々な船を漕ごう活動風景



12月 マリンクラフト  
作成活動風景



12月 ビーチコーミング活動風景



1月 森戸川ネイチャーハイク



2月 海藻おしばつくり活動風景



1月 三ヶ岡ネイチャーハイク

### 1日のおおまかな流れ

08:00~10:00	スタッフ、ボランティアリーダーの事前ミーティング、器材準備、設営
10:00~10:30	集合、ガイダンス、アイスブレイキング、身支度ほか
10:30~12:00	アクティビティ
12:00~13:00	昼食（基本は野外）、休憩（野外での自由な遊びの時間）
13:00~14:30	アクティビティ
14:30~15:00	振り返りワーク（シートに記入など）、気づきの発表、まとめ、解散
15:00~16:00	撤収、器材の片付け（洗い、干し、収納）
16:00~17:00	スタッフ、ボランティアリーダーの評価会（事後ミーティング）

### 「小学生が歩ける範囲」を発見の宝庫に

サンゴ礁や南極、アマゾンなど「遠くの大自然」ではなく、本事業は身近な自然に目を向け、多様な命と連鎖や循環、生態の不思議を発見しようとする。「自然の一部としての自分」を見つける場所、それこそ小学生が歩ける範囲の身近な野外だ。当センターでは、子どもが自分の目でよく見、気づき、疑問を持ち、考えることを重視している。子どもが立ち止まったら、歩みをとめ、驚きを共有し考えを促せるよう、柔軟な進行を心がけている。地域との協働、連携は積極的に行う

葉山は自然の中で活動する人材にも恵まれている。積極的に働きかけ、プログラム指導で、漁協、個人漁業者、里山保全グループ、炭焼きグループ、ヨットクラブなどの協力、連携を得ている。また、ボランティアリーダーとしての個人協力も地域から得ている。

### (3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

地域の子どもは地域が育てる

地域活動団体のネットワーク「NPO 法人葉山まちづくり協会」に参加して情報交換と交流を図るほか、日ごろから海辺に親しむ人々との交流を心がけ、連携の下地作りをしている。保護者にもリーダーとして楽しくかつ責任を持った協力を得、定着に成功している。

なお、連携協力に際しては「団体に協力した」のではなく「地域の子どもを育てる」と実感できるよう、子どもとの直接的な触れ合いを大事にしている。祖父母に当たる年代の協力者も多く、核家族の子どもには日常にない交流が刺激となり、協力者にとっては子どもが素直に関心を持って指導を受けることに、生きがいを感じるなど成果を上げている。

**ボランティアリーダーには責任感とやりがい**

地域外からのボランティアリーダーは、定期的な指導者養成講座の開催や、HP、自然体験活動ネットワークのメールマガジン、広報誌などで常に発掘と開拓を図っている。参加リーダーには、経験に応じて子どもの指導に責任分担を課している。「子どもの成長に係わった」という実感をやりがいに、継続と研鑽の動機づけを図っている。

毎月のリーダー研修でレベルアップ

とくにリーダー育成上で重要なのが、第1土曜日に行うリーダー研修だ。毎月のプログラム検証と技術向上のための実習、安全管理の検討などを行う。スタッフとリーダーがプログラムの目的やあり方を共有し連携を強めるためにも、欠かせない機会となっている。

### (4) 安全面への配慮について

安全面では何重もの策を巡らし、危機の察知や危機管理に敏感であるよう心がけている。

- 1) 事故対応のチャート作り：事故発生後の対処手順、役割分担、連絡先一覧をチャート化
- 2) リーダー研修：各月のプログラムに沿った安全管理を検証。子どものメンタルケアなど、広く安全に係わる疑問や悩みも話し合う。救命救急法の実習も年に1回は盛り込む
- 3) 当日の危険予測と対策：朝のミーティングで、当日の天候や海況を確認、活動全体の危険ポイント予測と対策について共通認識をもち、緊急時対応の役割分担を行う
- 4) 人員配置：つねにすべての子どもに目が届くよう人員を配置。海面活動では、子ども2名にリーダー1名、他は3名に1名の配置。リーダーとサブリーダーで役割分担することも



10月 色々な船を漕ごう研修風景



1月 ネイチャーハイク研修風景



2月 海藻おしぼり研修風景



## (5) 参加者、指導者の感想など

子どもたちには毎回「今日の発見」を絵や文で表現するワークシートと、絵日記を寄せてもらっている。同じフィールドでも印象に残るものは感性により個々で異なる。意外な目のつけ所や、鋭い観察眼に大人は驚かされるが、その驚きこそが活動に参加する楽しみであり原動力になっている。ボランティアリーダーは年間を通じて同じ子どもたちと接するため、目を見張るような子どもたちの成長ぶりが、やはり活動の喜びだと話している。

## (6) 本事業の成果、今後の課題

熱意と誠意あふれる多くの協力を得て、安全かつ充実したプログラムの提供ができた。

地域の海や山里で活動する多世代の大人と交流し、専門的な知識や、自然相手の現場にいるプロフェッショナルの人となりに触れ、子どもたちは世界を広げた。何より、自然の中で伸び伸びと体も感性も開放して過ごす1日は、子どもの心身を成長させたと確信する。

今後の課題は、ひとつには指導者の十分な確保があげられる。予算面が足かせになっている側面もあり、消耗品の充足でも同じ課題を抱えている。今後さらに、地域人材の連携と協力をあおぎ、プログラムの充実とともに、地域社会の向上に役立ちたいと願う。

## (7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて

リーダー研修をより充実させる

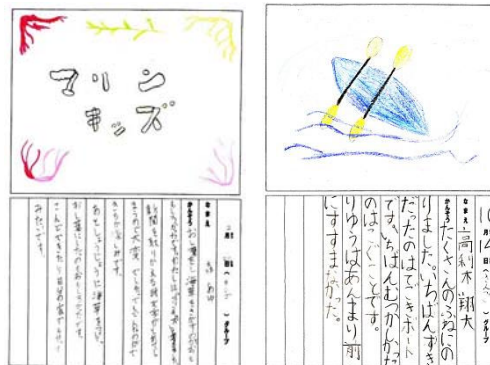
ボランティアリーダーのスキルアップのため、次のように毎月の研修を充実させる。

- 1) 各プログラムの意義や目的を明確に意識した、スキルアップのためのメニュー作り
  - 2) 研修プログラムの開発を進め、限られた研修機会の有効活用を目指す
  - 3) 子どもと同じ目線で「発見」できる資質を備えた、感性豊かなリーダーを養成する
- 多様かつ個別なニーズに応える体制作り

低学年と高学年とでは、興味の対象や理解力、表現力に開きがある。今年度は全学年同クラスで互いに助け合う環境を作り上げてきたが、来年度は低学年と高学年に編成を改める。低学年は自然の中での発見と「自分でできた!」を目標に。高学年はさらに発見を促し、「なぜ?」「わかった!」へつなげる。すべての子の可能性を自然体験で伸ばしたい。



毎月発行する通信



プログラム後、子どもたちから寄せられる感想文

自然体験活動指導者による効果的な放課後活動の取り組み

## 山梨県

### (1)事業概要

NPO 法人国際自然大学校日野春校（以下日野春校と略す）では、平成 19 年度「ひのはる冒険隊」という名称で、地元北杜市の小学生を対象としたプログラムを実施した。このプログラムのスタートは平成 17 年度文科省の「子どもの居場所事業」の助成を活用したのがきっかけである。日野春校のある北杜市では、当校以外に、北杜市教育委員会でも「子どもの居場所事業」の助成を受けて、北杜市の小学生を対象に活動が行われていた、市の活動は平日放課後に、「映画鑑賞」や「読み聞かせ」「紙芝居」といったように公民館や図書館を利用した室内の活動である。その活動とバッティングしないように、①週末の実施、②野外での活動をおこなうことにして事業を組み立てた。実施にあたっては、活動を異年齢でおこない、仲間と協力することや、力を併せてひとつのものを作るなど達成感を味わえる活動を重視しおこなった。

**実施日・時間帯**

ほぼ月 1 回、土曜日及び日曜日の 2 日間連続、同一プログラムを 2 回おこなう。

**実施場所について**

NPO 法人国際自然大学校日野春校（山梨県北杜市）

**参加者数**

北杜市の小学生子ども 各回 32 名

**募集・広報について**

北杜市教育委員会の後援をいただき、市内の小学校にチラシを配布。地元ミニコミ紙のイベント情報での告知。

**参加費**

1500 円

## (2) 放課後活動事業のプログラムについて

実施したプログラムは以下の通りである。

実施月	プログラム名	内容	活動写真
10月	稲刈りと昔の脱穀体験	稲を鎌で刈って、はざにかける。千歯こき、唐箕を使用して昔の脱穀体験をする。	
11月	落ち葉で遊ぼう	落ち葉を集めて、落ち葉プールを作る、作った落ち葉プールで遊ぶ。落ち葉を集めて焼き芋を焼く。	
12月	しめ縄づくり	縄のない方を学ぶ。しめ縄をなう。なったしめ縄に木の実などをつける。	
12月	日野春野遊び	ドッチボール、かくれんぼ、Sけんをして遊ぶ。	
12月	みんなでおもちつき	もち米をゆでる。もちをつく 鏡餅を作る。きな粉やあんこなどで食べる。	



12月	お正月ゲームと書初め	花いちもんめ、かくれんぼ、すごろくなどのゲームと書初め大会	
1月	ひのはるフレンドパーク	イニシアティブゲームをおこなう。	
2月	焚き火で遊ぼう	焚き火の材料を集める。焚き火をして、焼きりんごを作る。花炭の材料を集めて花炭をおこなう。	

プログラムを提供するには、次の点を考慮した。

1. 節感を感じられるものやその季節にしか出来ないものをテーマとする。  
例：落ち葉遊び、焚き火
2. 元の文化や生活に根付いたものを伝える。実施にあたっては地元の方に講師になっていただいたり、事前に専門的な知識、技術を教えていただいたりした。  
例：稲刈り、しめ縄づくり、もちつき

### (3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

日野春校は、開校して約15年を迎え、地元との関係づくりがすでに出来ており、支援者がいるという、比較的恵まれた条件にある。農業関係や林業関係については指導できる人を把握しており、日程が合えばお手伝いいただくことが可能である。ただ、専門的な知識は豊富であるが、伝えるという技術においては個人差があり、その部分をうまく員なた一プリテーションする必要がある。

そのほかにも教育委員会とのパイプもあり、人材発掘をするときの情報収集先として活用をしているほか、地元の郷土資料館学芸員の方や環境教育の学習会のメンバーなど、指導者とのネットワークを構築できているのは強みである。

ただ、日野春校がある塚川地区は高齢化が進んだ地域であり、60歳を過ぎた方も「現役」で元気に農作業をしている土地柄であり、ボランティアとして指導をお手伝いいただくのには限界があるのも事実である。日野春校では、縁があつて、山梨県内の教員養成大学で

ある都留文科大学の学生が、ボランティアスタッフとして指導にあたってくれている。

将来小学校の先生になるという目標も持ちながら、実際の子どもとかかわれないという不満がある学生にとって、子どもとの自然体験は学ぶものが多いと思われる。また取り組み姿勢も非常にまじめであり、勉強熱心である。また塚川地区の方と学生とのつながりも出てきて、活動を通じて、学生たちの育成をするというシステムができています。

実際のプログラムにあたっては、可能な限り前日のミーティングや、しめ縄づくりやもちつきなどの特殊なプログラムにおいては、事前にトレーニングをおこなってから実施をしている。また同一プログラムを2日間連続でおこなうことで、初日の活動の反省をもとに2日目の活動を改善しておこなうことで、指導力のアップとプログラムの精度の向上につながっている。

#### **(4) 安全面への配慮について**

安全面についての基本的なスタンスは、「危険だからしない」ではなく、「危険なことを教えて怪我をしないようにさせる」というスタンスである。

稲刈りでの鎌の使用については、しっかりと鎌の使い方と「人に鎌を向けてはいけない」といったような禁止事項を伝えてからおこなわせている。またマッチで火をつける、ナイフを使うといった学校や家庭では禁止されていることも、生活力の向上のために指導者の管理の下、子ども達にやらせている。そして、それをすることが民間教育団体の役割ではないだろうか。

また、天候への対応も考慮した。冬の日野春は強風の日が多く、焚き火などをするときには風よけを配置したり、風が吹かないところでおこなったりした。

#### **(5) 参加者、指導者の感想など**

参加者はほぼ固定化しており、毎回活動を楽しみにしている。『もちつきが楽しかった』『落ち葉プールが気持ちよかった』『焚き火をもっとしたい』といったように、非日常の自然体験活動への満足度が高い。また学校間を越えて参加者同士が友達になって、その子たちと会えるのも参加する楽しみになっている。

指導者の感想は、『子どもと一緒に遊べて楽しかった』『子どもの可能性ってすごいな』といったように、子どもへ視点をむけたものが多かった。指導者もほぼ固定化しており、子ども達と毎月会うのを楽しみにしている。活動後も子ども達の様々なエピソードで話が尽きないほどである。またこのプログラムのもうひとつの目的は、指導者である学生自身の自然体験活動の蓄積と指導力の向上である。プログラムによっては、指導者である学生自身が初めておこなう活動がある。例えば焚き火プログラムでの「花炭作り」がそれにあたる。金曜日のミーティングで指導について学び、土曜日に子ども達と一緒に体験し、日曜日に指導するというステップを踏み、プログラムの習得をさせている。子どもと同様「出来なかったことが出来るようになる」喜びや、新しい経験が活動の原動力になっている。

るようだ。

#### **(6) 本事業の成果、今後の課題**

事業の成果としては、地元の小学生達に自然体験を提供でき、NPO としての地域貢献活動ができたということがまずあげられる。そしてその活動がうまく行政とすみわけができた活動であることも成果である。また、学生指導者の育成がプログラムを通じて出来た点も成果といってよい。

今後の課題としてあげられるのは、参加者数の増加があげられる。助成金事業であったために、少ない参加者数でも活動を実施できたが、次年度助成がなくなれば、活動自体の継続が困難になる。また、平成 17 年度からの「居場所事業」からの参加者もおおり、プログラムも一巡し、次年度からはプログラムの見直しもしなければ、三年間きてくれたリピーターを喪失する危惧もある。

#### **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

実施継続するために、以下のことをおこなう。

- ・募集エリアを北杜市から拡大し、甲府市、甲斐市、韮崎市まで拡大する。
- ・プログラムを見直しし、新規プログラムをおこなう。また新鮮みをだすために外部講師の登用をおこなう。
- ・参加費の値上げを検討する。

自然体験活動指導者による効果的な放課後活動の取り組み

## 長野県

### (1)事業概要

本事業では、身近な環境（自然環境・人的環境）を活かして放課後や週末の子どもたちに居場所（プログラム）を提供し、自分たちの暮らしている地域の魅力を発見したり、子どもたち同士や地域に暮らす人々との絆を深めることを目的に、地域 NPO・地域住民とが連携して実施した。

#### 実施日・時間帯

08月 25日(土)、30日(木)  
09月 1日(土)、12日(水)、17日(月)、24日(月)  
10月 3日(水)、10日(水)、17日(水)、23日(火)  
11月 1日(木)、8日(木)、17日(土)、28日(水)  
12月 2日(日)、7日(金)、12日(水)、19日(水)  
01月 8日(火)、15日(火)、23日(水)、30日(水)

9月までの平日 : 午後5時から  
10月からの平日 : 午後4時半から  
土・日 : 午後1時から

#### 実施場所について

長野県泰阜村田本地区

子ども人口の少ない泰阜村において、比較的子どもの多い地区であること、無理なく散策できる山が近くにあること、地域に根ざして活動している NPO があることで人が集まりやすい環境にあり、また地域 NPO と協働・連携しての活動を行いやすいため。

#### 参加者数（のべ人数）

こども 240 名

#### ボランティア・スタッフ人数

専門講師 1 地域指導者 6 地域住民多数

#### 募集・広報について

小学生の保護者へは、小学校を通じて案内を配布した。また、地域住民へは、地域コミュニティ(地区常会)を通じて各戸へ案内を配布した。

#### 参加費

無料

## (2) 放課後活動事業のプログラムについて

8月25日(土)：身近な沢の探検



8月30日(木)：用水路の生きもの探し1



9月1日(土)：ツリークライミング



9月12日(水)：用水路の生きもの探し2



9月17日(月)：虫を探しに行こう

9月24日(月)：ハイキング(栗拾い)

10月3日(水)：粘土で遊ぼう(焼き物作り：粘土に親しむ)

10月10日(水)：粘土で遊ぼう(焼き物作り：粘土の扱い方)

10月17日(水)：自分で使う食器を作ろう(焼き物作り：カップ成形)

10月23日(火)：自分で使う食器を作ろう(焼き物作り：釉をかける)

11月1日(木)：フリープログラム(大かくれんぼ大会)



11月8日(木)：干し柿を作ろう



11月17日(土)：大先輩の山案内(大峰山ハイキング)

11月28日(水)：落ち葉を集めに行こう(秋の山と落ち葉焚き)



12月2日(日)：大峰山の落ち葉すべり・木工材料探し

12月6日(木)：木工(箸・スプーン作りなど)



12月12日(水)：木工(箸・スプーン作りなど)

12月19日(水)：木工(箸・スプーン作りなど)



1月8日(火)：作った干し柿を食べよう(おばあちゃんのお話会)

1月15日(火)：フリープログラム(雪遊び)

1月23日(水)：フリープログラム(雪遊び)

1月30日(水)：一足早い春探し



●年間通じて子どもたちがあきることのないバラエティー豊かなプログラムを提供し続けるためにどのような工夫をしているのか

- ・子どもは本来自由に遊ぶものである。子どもたちから自然発生する遊びは息が長い。そのことを踏まえ、自然発生的な遊びの要素を含ませた。
- ・身近にある自然素材で、自分の暮らしにつながる道具が作れることに気づかせ、そこから身の回りの自然環境に今までとは違う視点の興味を持てるようにした。
- ・普段なにげなくしていることが、実は豊かな生活であることに気づけるように、特別なことを敢えてプログラムとした。
- ・時にフリープログラムとし、子どもたちの好きなように遊べる時間を設けることで、自分たちで考え、実施する場面を設けた。

●身近な野外フィールドにおける自然体験プログラムを考案・実施する上で留意した点

- ・身近とはいっても、私有地であったりするところもあるので、あらかじめフィールドとして使えるのかどうか確認しておく。
- ・活動場所の下見を行い、危険箇所の確認をする。
- ・今ある姿を壊すような活動ではなく、活かした活動プログラムになるよう思案する。
- ・活動場所近隣住民への協力依頼

●地域内のどのようなセクター（行政、民間、学校など）と協働・連携をしてきたか  
自然体験NPO、地域住民、教育委員会等

### (3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

●地域内の大人の協力を得るために、どのような工夫をしているのか

地域コミュニティ(地区常会)が機能しているので、その場を通じて活動案内を各戸へ配布し、協力を仰いだ。

●指導者（スタッフ、ボランティア）をどう確保しているのか

関係各団体・個人に活動の主旨について説明し、理解していただいて協力を仰いだ。

●指導者をどのように育成しているのか

地域住民の持つ力がそのまま指導力となっているため、特になし。

#### **(4) 安全面への配慮について**

- ・各プログラム実施の際、スタッフ側で下見・安全確認等するのはもちろんのこと、子どもたちとセーフティトークをすることで、子どもたち自身で危険を考え、どのようにしたらよいのか考える時間をとった。
- ・危険なものをすべて排除するのではなく、どう対処したらよいのかを考えることで子どもたち自身に危険回避能力が備わるように心がけた。

例えば・・・

- ・道具を使うことは危険も伴うことでもあるので、正しい道具の使い方を子どもたちと一緒に考え、自分たちでルールを決める。
- ・外で待ち受ける危険にはどのようなものがあるのか、子どもたちと一緒に考え、回避するにはどのようなことに気をつけたらいいのか考える。(危険箇所だけでなく、危険な生き物：サル・熊・いのしし・まむし・やまかがし・すずめばち等がいることも含めて)

#### **(5) 参加者、指導者の感想など**

##### **【参加者の感想】**

- ・ゲームはなくてもたくさん遊べる。
- ・近くの山だけ登ったことなかった。また登りたい。
- ・焼き物のつるつるは、灰からできてることを知ってビックリした。
- ・おばあちゃんが小さかったころは遠くまでうんと歩いていたことを聞いて、すごいなあと思った。竹から竹へ渡る話を聞いて、やってみたいと思った。
- ・近所のおじさんが山を案内してくれて、隠れられるところがあったり、自分で遊ぶ道具を作れたりできてすごいと思った。

##### **【指導者の感想】**

ちょっとしたきっかけで子どもの遊びは膨らんでいくのが本来の姿。自然豊かなこの地域に暮らしているにもかかわらず、子どもの数の減少、社会環境の変化などから、外で元気に遊ぶ子どもは減ってきている。合わせて、自分たちの地域のすばらしさを体感することも減ってきている。本事業の中で子どもたちがみせた姿は、好奇心旺盛であちこち飛び回るかと思えば、すごい集中力でひとつのことに取り組むなど、子どもらしい姿であった。

また、地域の方の協力で、自分たちの暮らしている場所の豊かさにも触れられたと思う。本事業を通じて、子どもたちが自分の暮らす場所は魅力的な場所であることに気づききっかけになれば、と思う。

地域の方とNPOとが協働することで、地域の持つ人的財産を十分に活用できたのでは



ないかと思う。今後も互いの持つ力を出し合い、地域で地域の子どもを育てていくという視点をもって、子どもたちをとりまく環境を守っていきたい。

## **(6) 本事業の成果、今後の課題**

### **●成果**

- ・自分たちの暮らす地域のもつ魅力の発見
- ・子ども間の交流促進
- ・地域住民とNPOとの連携

### **●課題**

- ・子ども間のコミュニティの形成
- ・次世代への伝承者育成

## **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

地域内のNPOや小中学校との日常的な連携を促進するとともに、保育園や婦人会、老人会、自治会など、多様なセクターへの情報共有を密にしていく努力を続けること。

自然体験活動指導者による効果的な放課後活動の取り組み

## 愛知県

### (1)事業概要

CONE 受託 文部科学省放課後子どもプランモデル事業は子どもが地域社会の中で放課後や週末などに安全で安心して、健やかにはぐくまれるよう地域の参画を得ながら学習やスポーツ・文化活動の取り組みを実施するものである。

#### 本事業の特徴

(社)日本ネイチャーゲーム協会都道府県組織である、愛知県ネイチャーゲーム協会ではネイチャーゲーム体験をはじめ、様々な自然体験を通し、子どもたちが地域の自然環境と親しみ、活動を通してコミュニケーション力を高めるプログラムを企画実施した。

過去2年間に渡り、「子どもの居場所事業」を実施したので、参加する子どもには地域の環境に気づき、親しむことに加え自らの考えを仲間に伝え、行動する機会となるような仕掛けづくりと保護者や地域の大人を巻き込んだ事業となるよう前年のプログラムを発展させた。また地域ではネイチャーゲームは環境教育として自然系や環境系の位置づけで活動しているが、表現する活動としても大変有効であることに着目し、身近な自然の中で日本語を活用したネイチャーゲームをアレンジしたアクティビティの開発と実施、参加した子どもによる意見交換を行った。

地球温暖化防止や生物多様性プログラムとしてネイチャーゲーム体験のイベントが実施されているが、一過性であるのに対し継続型の本事業を通し、子どもの提案で「CO2削減アイスブレイクゲーム」が生まれ、子どもによる子どもへの活動が展開されたのも成果である。

#### 実施日・時間帯

期間は平成19年10月～平成20年1月の期間に23回開催した。後半に集中したのは他事業との調整と子どもの居場所の趣旨を受け、愛知県ネイチャーゲーム協会独自の運営で開催する方向だったからである。開催日は土曜日、日曜日など週末に加え、冬休みと毎月第3木曜日の放課後である。開催時間は放課後を除き、おおむね午前中2時間である。

#### 実施場所について

愛知県名古屋市

前年の子どもの居場所事業からの継続開催を子ども、保護者に約束していたことが一番の理由である。また指導員や地域の大人の協力を得やすい場所でもあった。地球温暖化防止や生物多様性に対する行政の取り組みが活発な地域でもある。

#### 参加者数（のべ人数）

対象は小学生・中学生とその家族であったが、兄弟での参加希望もあり、幼稚園児も保護者つきで受け入れることとした。毎回の平均参加者数は10名ほどである。総参加者数332名（子ども176名／大人46名）

ボランティア・スタッフ人数

指導員及び協力者113名

## 募集・広報について

チラシは3期（平均8回分掲載）に分けて作成した。組織のHP掲載や実施会場の野外掲示板の活用、使用する学習センターや地域の公共施設、学校、リピーター、地域のイベント時などにチラシを配布した。チラシは各回のプログラムタイトルを工夫し、持ち物なども記載して事務的な手続きは簡素化して仕事量を減らした。ここまでは従来の広報と同じであるが特筆すべきはリピーターの母親の宣伝力である。広報に加え、放課後の実施は参加者の申込みの取りまとめから送迎まで協力いただき、強力なサポーターとなっていた。家族ぐるみの参加をしていただいだけ、他事業への参加にも相乗効果を生み、多くの指導員と交流が生まれた。

## 参加費

小学生以上の子どもで1回300円である。

## (2) 放課後活動事業のプログラムについて

### 活動の一覧

回数	日程	タイトル
1	10/14 (日)	「木にせまる」なごやNGの会「全国一斉ネイチャーゲームの日」共催
2	10/27 (土)	「CO <sub>2</sub> 削減ゲーム」
3	11/3 (祝)	「今日はみんなで竹刈りだ！」名東自然倶楽部イベント参加
4	11/4 (日)	「探検！森の冬支度」～森の生きものたちを発見しよう～
5	11/15 (木) 放課後	「どんぐりクラフト」～どんぐりコロコロ遊んじゃおう～
6	11/17 (土)	猪高の森のいただきものその1「楽器をつくろう♪」
7	11/18 (日)	「落ち葉で遊ぼう」～葉っぱだけでこんなに楽しい～
8	11/25 (日)	猪高の森のいただきものその2「きのこ&昆虫をつくろう！」
9	12/8 (土)	食う、食われる ～自然のいとなみ～
10	12/9 (日)	猪高の森で ～狩人の訓練いろいろ～
11	12/15 (土)	自然とともに ～旧暦で遊ぼう～
12	12/16 (日)	今年も挑戦！ ～子ども樹木博士認定活動～
13	12/20 (木) 放課後	クリスマスやお正月アイテム ～カードづくり～
14	12/23 (日)	よーく、考えてネ！ ～このみのみ探し～
15	12/24 (祝)	なんてすてきな！ ～森でのクリスマスイブ～
16	12/26 (水) 冬休み	木を使って、隠れ家造り その1
17	12/27 (木) 冬休み	木を使って、隠れ家造り その2
18	1/13 (日)	～大地のまどになって～ 「落ち葉のふとんはあたたかい！」
19	1/14 (祝)	～みんなで探そう！～ 「猪高の森の自然はっけん」
20	1/17 (木) 放課後	～鬼は・・・ 福は・・・～ 「葉っぱでお面！ 節分の準備」
21	1/19 (土)	～みんなで考えよう！～ 「猪高の森にしてあげたいこと」
22	1/26 (土)	～何して遊ぼう？～ 「ネイチャーゲームリクエスト」
23	1/27 (日)	～また会おう！～ 「あなたも子ども自然案内人！」

### プログラムの工夫例

23回のプログラムを作成するにあたって、全体を通して留意した点は以下の点である。

平成18年度子どもの居場所事業と同じ会場であることから、リピーターが多くなる。プログラムで実施するネイチャーゲームや他の自然体験の内容は同じでも、参加する子どもが自ら考え意見を言う機会をつくる。自分たちが楽しむだけでなく、友だちや自然にして何かしてあげたくなるような仕掛けづくり。自然体験を自らの言葉で表現する機会を多くする。保護者に活動内容を理解して頂くである。

以下は留意点を意識した個々のプログラムである。全体的なねらいとは別に個々のねらいとともに事例として紹介する。

注：事例1～4の参考写真は別紙

#### 事例1「CO2削減ゲーム」

<ねらい>

自らがルールを考え、子どもリーダーとしてプログラムを実施するのが楽しみとなる。

<内容>

生活で出るCO2と木1本の平均的なCO2吸着量の収支をゲーム感覚で点数に表し、緑地の木や葉を使ったゲームで点数還元する内容である。子どもに体験してもらい、ルールや点数付け、適正人数の改善を考えてもらった。次の実施は子どもがリーダーとなるよう約束した。



#### 事例2「今日はみんなで竹刈りだ！」・「木を使って、隠れ家作りその1・2」

<ねらい>

地域の大人の協力や団体との連携をはかる。活動を通して仲間との協力やコミュニケーション力を高める。増えすぎた竹の伐採やそれを活用するプログラムから協働や連帯、安全確保、道具の使い方などを学ぶとともに苦労して作り上げる達成感を味わう。

<内容>

竹刈りは地域の森づくり団体のイベントに参加して、竹の除伐作業と枝払いのやり方を学び、竹食器でおぜんざいを食べるなどした。隠れ家作りは間伐した竹を柱に使い、2m四方の小屋を作った。リーダー選び、場所確保、竹切り、ネームプレートや合言葉を作るなど2日間をかけて行った。木の確保やしゅろ縄の結び方、柱打ちなどは地域の大人の指導と協力で行った。



### 事例3「今年も挑戦！ ～子ども樹木博士認定活動～」

<ねらい>

継続することで挑戦する意欲やステップアップする楽しさを感じる。

<内容>

樹木や葉の特徴をネイチャーゲームの手法で感覚を使って親しみながら、木の名前覚えてから、ペーパーテストによる検定を行った。覚える時間は大人、子ども関係なく木の名前がわかる人がみんなに教え合った。



### 事例4「自然とともに～旧暦で遊ぼう～」・「なんてすてきな！～森でのクリスマスイブ～」・「～鬼は・・・福は・・・葉っぱでお面！節分の準備」

<ねらい>

旧暦や季節の行事の楽しむ心を育てるとともに自然から感じたことを漢字熟語や俳句、詩などの手法で表現し発表する機会とする。プログラム内容を楽しく簡単に動きのあるものだけにするのではなく、考える機会や動と静の活動の両立をねらう。

<内容>

旧暦で遊ぶは旧暦と月との関係を学んだあと、感じた自然を漢字で表現し自由な読み方でその時の気持ちとともに発表した。クリスマスイブは全員で1本の木に森にしてあげたいことを書いた飾りをつけた。節分は読み聞かせのあと、葉っぱやおせんべいで鬼のお面を作った。



その他

緑地からいただいた「森のたからもの」と称する葉や小枝、木の実などを使った様々なクラフトは飽きのこないプログラムである。また寒い時期の氷の張った田んぼや生きもの探しは子どもが嬉々として走り回り、体験不足が言われる中でも子ども元来の遊びの原点をみることができた。



### **(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について**

本事業の指導者、協力者総数は113名である。平均5名ほどの大人が過密なスケジュールにもかかわらず、ご協力いただけたことにまずは感謝したい。

ネイチャーゲーム指導者の半数は平成19年に資格を取得した、地域在住あるいは近隣の人で占めた。そこへ地域でネイチャーゲーム普及活動をしている「地域の会」の指導者が加わり、新旧の指導者構成によってプログラムを展開した。本事業が新指導者のネイチャーゲーム実践や研鑽の場となるよう養成講座後、速やかに参加を促し、地域から受講した人が指導者として積極的に関わっているのが現状である。

本事業では様々なプログラムを実施するという観点からニューアクティビティの試行や他の活動を体験できる機会となり、仲間同士でも得るものが多く、今後の活動への刺激となった。地域に根ざした活動の継続と発展のためには学校や家庭、地域などの個性と子どもをとりまく様々な環境を理解した指導者や大人の協力が必要である。毎月、第3木曜日の放課後プログラムを企画したときも、学校行事やおけいごと、幼稚園児送迎時間など保護者を含む、地域の大人の意見が参考となった。

市民団体の協力を得るには行政や他団体主催の事業へ参加や協力など連携を密にしておくことと情報の共有などネットワークづくりが不可欠である。緑地で間伐した竹の提供や隠れ家づくりの指導など地域の森づくり団体や大人の快い協力をいただいた。

本事業はリピーターの母親、父親の協力が多方面にわたりいただけたことである。個々のプログラムのお誘いや終了後の報告、お礼などを頻繁に行い、送迎時の指導者とのコミュニケーションを丁寧にするすることで、本事業への理解とプログラムへの参加が促されたと考える。

ちらし配布や口コミによる広報・参加者の取りまとめや送迎・プログラム実施時の教材配布や子どもの面倒など多大な支援を頂いた。多くが転勤族であるため、交流が続かないことへの心配に対し、子どもや家族の変化を通して、本事業の趣旨が理解でき今後も楽しみにしている。地域にいる限り協力し次の協力者を作っていきたいと話していただいた。

継続することで様々な立場の大人が協力し、コミュニケーションをはかりながら、地域で子どもを育てる力となっていることが実感できた。

### **(4) 安全面への配慮について**

- ・会場の緑地は何回も入っているところなので、実施日の天候で配慮すべきことやプログラム中の危険などを中心に知らせた。かぶれやハチに対する知識や回避方法はリピーターの子どもの間に伝える時間を作り、子どもが双方向で危険に対して学びあえるよう工夫した。
- ・のこぎり、なた、はさみなどを使って野外で小屋を作ったときは、はじめに道具の扱いや切った枝を運ぶときの注意・自分や周囲への安全確認・協力しない人は参加できないルールなどを書いた資料を配布し、全員で音読して意識づけた。
- ・プログラムの柔軟な変更で低学年にも対応できるようにしておく。



- ・寒い時期の開催には、受付から開催までの待ち時間を短くするなどした。
- ・長丁場なので指導者自身が疲れない、無理のない運営のために指導者の意見を日々反映させた。
- ・毎回、指導者の振り返りのミーティングを実施し、申し送りノートに記録した。会場の生涯学習センターには自主グループ用の引き出しが設置されており、指導者の共通認識がはかった。
- ・走らないと言っても走りたがる年齢であるので、言葉がけのメリハリとなぜ危険かという理由を伝えるようにした。
- ・子どもを信じ、見ていないようで観ている態度と危険に関する経験と知識、事前対応力を持つようにしたい。

## (5) 参加者、指導者の感想など

### 【参加者の感想】

- ・竹刈り体験で、枝を払うのがおもしろかった。竹の器作りが楽しかった
- ・始めはお母さんに言われて参加したが、今はだんだんと楽しくなって自分から参加している。
- ・CO2削減ゲームは自分たちで意見を出し、ルールづくりをしたのでまたやりたい。
- ・森の中のかくれんぼはいつも自分たちがするかくれんぼと違っておもしろかった。
- ・もっとたくさんしたい・落ち葉をキャッチするのがなかなか難しかった。
- ・クリスマスツリーには森にしてあげたいことをいっぱい書くことができた。
- ・子ども樹木博士認定活動は3年間も挑戦しているので来年もがんばりたい。
- ・3月以降も隠れ家づくりはやって欲しい。終わってから別の日でも、作った隠れ家で遊びたかった。すぐ片付けてしまって残念。
- ・トカゲの卵見つけや池での釣りもしたい。
- ・今日は何をするのかとワクワクしている。
- ・クリスマスツリーがきれいだった。
- ・4文字熟語は写真に取ってほしい。
- ・氷がこんなに張っているのは見たことがない。
- ・今度はいつから始まるのか教えてほしい。
- ・最後から参加できず、くやしい。

右は最終回「お別れ会・また会おう！」に参加した子どもたち全員で作った詩。

### ネイチャーゲーム<フォールドポエム>

- ・いっぱい、森であそんだね
- ・ひみつきちをつくったよ
- ・じゅもくはかせもやった たのしかった
- ・いっぱいまたあそぼうね
- ・はっけんいっぱいだよ
- ・いろんのはっけんしたね
- ・いろいろないきものがいたね
- ・かくれがづくりをした
- ・すごいかくれがつくった
- ・またたくさんゲームしようね
- ・いっぱいいっしょにたのしもう
- ・いろんなものをみてたのしかったね
- ・とりのなきごえがおもしろかった
- ・カモフラージュがおもしろかった
- ・ささから木のえだ?
- ・きのみをもらったよ きれいなみだったよ
- ・おかしのおにのおめんがおいしかったよ
- ・はっばのおめんもつくったよ
- ・またあおうね
- ・あったときには手をふってね わたしもふるよ
- ・いたかの森はとてすてきだと思わない?
- ・そうだね
- ・たのしかったね
- ・うん、虫さがしたのしかったね
- ・またやりたいね
- ・おにのおめんをつくって
- ・ねずみもつくったりしてたのしかったよ
- ・つぎはいけるかわかんないけど いけたらいつて
- ・またみんなにあいたい
- ・すごいかくれがつくった



### 【指導者の感想】

- ・自然に興味のなかった夫（子どもの父）が自然に出かけるようになってきた。
- ・最初は自然にあまり興味のなかった子どもが変わってきた。
- ・ひっこみじあんで外で遊ばなかった子が外でみんなと遊べる楽しさを知って喜んで参加する。
- ・こんな身近に緑地があり自然体験ができて驚いた。
- ・家族でいろいろ体験ができうれしい。
- ・友人が参加すると言うのでいっしょに参加した。
- ・大変いいことをしていると思う。風邪気味でも参加したいと言う。
- ・大人より子どもの発想や感性が自由で豊かで驚かされる。
- ・幼稚園の下の子どもも参加したがるので今後も保護者同伴で参加させたい。来年は小学1年生となるので参加を楽しみにしている。
- ・次年度のスケジュールはいつできるか早く教えてほしい。
- ・隠れ家造りは冬休みの宿題で楽しかった思い出として、子どもが学校へ提出する。
- ・夫の転勤が来年でなく、当分参加できてうれしい。学区の参加者を増やし、この教室の楽しさを伝えてリピーターを作る協力をしたい。
- ・次回の開催のお知らせを楽しみに待っている。
- ・子どもには色々な体験をさせたいと思っているので、この教室の存在はうれしい。

## (6) 本事業の成果、今後の課題

### <本年度の成果>

- ・参加者や保護者が積極的に知人、友人を誘って参加してくださり、応援してくださる。
- ・ウィークデー開催を初めて実施した。開催、終了時間など保護者の意見を取り入れて企画したことが保護者の協力を得る結果となった。
- ・週2回の開催なので、無理のない運営を念頭に指導員の意見を反映させ改善していった。
- ・旧暦・樹木博士・クリスマスいずれも自ら考え、発表する機会を作った。今後も野外や自然を素材にした活動でも表現する力は養えることを緩やかに実践し証明していきたい。

### <今後の課題>

- ・参加者の年齢が実施側の想定より低学年だった時の対策が必要（アクティビティの変更など）
- ・参加者数は広報チラシのその日のテーマがとて大きく影響しているのでプログラム作成者は参加したくなるテーマや楽しそうなキャッチコピーを考える必要がある。
- ・新しい指導者を増やしていきたい。
- ・子どもたちが楽しんでくれ、もう少し遊びたいと言われて、定時刻に終了するのに苦労する。
- ・隠れ家づくりは子どもたちが今まで以上に積極的かつ協力する様子がみられた。様々な自然環境を備えた地域の緑地で子どもたちが自ら責任を持ち、自由で大胆に創造力を発

揮した活動ができたらと願う。しかし、現状は自然体験の場を提供する団体を通してでない活用できていない。プログラムを実施しながら、多くの子どもが「森から学ぶ」場づくりの必要性を感じている。

- ・緑地の特性を活かし、安心して子どもが遊べる場所を提供したいが、地域や行政、学校の理解や協力が必要と同時に安全やフィールドの保全など中途半端な関わり方ではできない。
- ・子どもの居場所から3年間の実績は保護者とのコミュニケーションが増し、集客にもつながっている。リピーターのみにならないような受入れ態勢や雰囲気作りにも心がける必要がある。
- ・コーディネーターを担う人が限られている。プログラムの実施には積極的だが、運営となると二の足を踏む人が多い。コーディネーターの人材確保が必至である。

### **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

子どもの活き々とした姿に指導者は達成感を感じているし実践や交流の場でもある。参加者のニーズと継続の使命も合わせて来年度の継続に関しては本事業開催中から話し合い、指導者間で継続実施の了解と協力を取っている。参加費の積立てを運営費に充当し、月1～2回の実施を考えている。新たな参加者確保も考え、開催場所は従来の緑地に加え、近隣の緑地も増やす予定である。3月にはネイチャーゲームリーダー養成講座を同緑地で開催するので前年同様、新指導者へのお知らせや組織のHPや会報を通して広く広報していきたい。

## 岐阜県

### (1) 事業概要

岐阜会場は、人口 1,800 人余りの小さな山村である白川村を拠点に活動する特定非営利活動法人白川郷自然共生フォーラム（以下、当フォーラム）が、環境教育による地域の青少年の健全育成を目的に平成 17 度から継続的に実施している学校外教育活動「里山遊び塾」の活動を基盤に実施。村内の二つの小学校に通う児童 143 名を対象に全 10 回実施したところ、のべ 181 名の参加があった。

### (2) 放課後活動事業のプログラムについて

ユネスコの世界遺産に登録された合掌集落で知られる白川村は、山間の狭小な平地に小さな集落が点在する山村で、交通の便が悪く、移動には自家用車が欠かせない地域である。

したがって、交通手段をもたない児童を対象とした活動は、その送迎手段の確保が必要不可欠となる。本事業では、こうした地域特性を踏まえ、

集合解散方法（現地集合現地解散と送迎つき）

催行日（平日の放課後と休日）

日程（日帰り型プログラムと宿泊型プログラム）

の 3 点について、異なるスタイルでの活動を試みた。

また、活動内容も、教わるものから、創造性をはぐくむもの、ふるさとの自然や伝統文化にふれるもの、仲間づくりを助けるものなど、様々なコンテンツを用意した。

- 第 1 回 クリケットにチャレンジ（コンピュータプログラミング体験） <休日日帰り>  
会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）
- 第 2 回 草木染にチャレンジ <休日日帰り>  
会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）
- 第 3 回 ネイチャークラフト&週末キャンプ <休日 1 泊 2 日>  
会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）
- 第 4 回 ばんどり（ムササビ）観察会 <平日放課後日帰り>  
会場：白川八幡神社（現地集合現地解散）
- 第 5 回 手づくり石鹸 <平日放課後日帰り>  
会場：鳩谷公民館（現地集合現地解散）
- 第 6 回 はじめての週末キャンプ&クリケットにチャレンジ <休日 1 泊 2 日>  
会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）
- 第 7 回 クリスマスリースクラフト <休日日帰り>  
会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）
- 第 8 回 鏡餅づくり <休日日帰り>  
会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）

第9回 白川小学校通学キャンプ‘プチ山村留学’ <平日放課後2泊3日>

会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）

第10回 平瀬小学校通学キャンプ‘プチ山村留学’ <平日放課後2泊3日>

会場：トヨタ白川郷自然学校（送迎つき）

### **(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について**

当フォーラムでは、原則として白川村民を対象に、こうした活動に協力していただける住民ボランティアを募り、現在までに9名の村民の方に登録いただいている。しかしながら、全10回の活動の内、実際に指導者として協力いただけたのは2名のみで、仕事の都合などの折り合いをつけながら当日の指導者を確保するためには、登録者数が絶対的に不足している点は否めない。

また、平均年齢も60歳を超えていることから、もう少し若い世代の取り込みを模索する必要があると考えている。具体的には、参加児童の保護者をターゲットに、休日などに実施する親子企画などの機会を捉えて、良い人材を発掘していきたい。

他方で、ヒデ細工（カエデ材の籠編み）や栃餅づくりなど、地域で伝承され続けてきた生活遺産ともいえる貴重な技術をもった指導者の多くは高齢者であり、これらの人材を指導者として活用するためには、日常的なおつきあいのなかで、そうした方々とのコミュニケーションを醸成しているファシリテーターが必要不可欠である。

本事業では、児童を対象にした活動の実施にまではいたらなかったものの、スタッフとそうした伝承技術者との交流をすすめた。

### **(4) 安全面への配慮について**

野外料理などで火を扱う場合や、餅つきなど、危険が想定される道具を使用する場合は、指導者1名につき何台といったように、その指導者が使用状況を管理できる数を指導者毎にそれぞれ配置し、個々の活動での安全管理の責任の所在を明確にするとともに、目の届かないところで児童のみが使用するといった事態が生じないよう対策を行った。

通学キャンプの実施にあたっては、小学校からキャンプ会場までの朝夕の送迎や、日常生活同様の健康管理に加え、催行時期が冬季であることへの配慮から、2泊3日という短い日程で4～5人の児童に1人の指導員を配置する少人数での試行的な実施とした。

### **(5) 参加者、指導者の感想など**

#### **【参加者の感想】**

「木の実をくっつけるのも楽しかったけど、木の実の名前を教えてもらうのも楽しかったです。」（小6女／クリスマスリースクラフト）

「餅を作るところから始めて、鏡もちを作ったことがないから、いい体験になってよかつ

た。」(小5女/鏡餅づくり)

**【保護者の感想】**

「子どもの方から、行きたい！行かせて！と言われることが多いが、なかなか家の都合などもあり、行かせてあげることができない場合もあるけれども、できるだけ、参加させてあげたいと思っているので今後も続けてほしい。」(小3女保護者)

**【指導者の感想】**

「以前、参加している男の子からこんなことを聞かれました。「どうして、いつもこんなに楽しい授業（おそらく活動のこと）を考えつくの？」と。普段、学校や家庭では体験することのできない様々な活動を、子どもたちはただ言われるがままにやっているのではなく、きちんと内容を理解して取り組んでいるように感じました。」

「活動の内容はもちろんですが、集団で活動するということにも意味があると私は考えています。お互いに協力し合ったり、助言したり、ルールを守ったりと自分ひとりだけではできないこともできるようになったり、まわりの友達のことを気にしあったりする心も同時にはぐくまれていくと思っています。」

「通学キャンプでは子どもたち一人一人とじっくり顔を合わせて話のできたので、スタッフとしても、とても充実した3日間でした。子どもたちが、普段、何を考え生活しているのか、個々の活動では見えない一面を見ることができ、たいへん良かったと感じています。」

**(6) 本事業の成果、今後の課題**

週末キャンプや通学キャンプといった宿泊型の活動や、集落の公民館や村祭が行われる神社の境内での活動など、多様なコンテンツ、多様なスタイルでの活動運営が、参加児童はもちろんのこと、多くの保護者や教育関係者に評価いただいている。

とりわけ、通学キャンプは、家族と過ごす休日を費やすことなく事業展開できるばかりか、日常的な生活を友人や家族以外の大人と共にすることで、自然と語らいの時間が多くなり、お互いにより深い関係をつなぐことができた。

また、保護者にとっても、期間中、子どもの世話の手間から解放されるリフレッシュ効果もあるようで、家族全員に良い効果をもたらしていると思われる。今回の結果を踏まえ、本格実施に向けて、定員や対象年齢、兄弟姉妹の受入れ、実施期間、費用負担、スタッフ体制などの検証を行っていきたい。

今回、岐阜会場の運営主体となった当フォーラム職員は、企業から管理運営を委託された自然学校で、主にその利用客へのインタープリテーションの提供を生業とするプロであり、その活動内容や運営手腕は既に地域の信頼を得ているものの、もっと、こうした地域に貢献する事業の展開が強く期待されている。そのような中で、本事業を通じて、初めて村内にある二つの小学校双方の児童を対象とした活動を実施することができたことは、更なる信頼に結びついたと思われる。

白川村には高校がないことから、多くの子どもたちが中学卒業後、村外で生活することを余儀なくされる。持続的な地域社会経営のためには、そうした村外での生活を経てもな

お、子どもたちが、いつかは自らの意思で村に帰ってくることを求められる。そのためには、自らが生まれ育ったふるさとに誇りをもつ、自立した青少年を育成する教育が必要不可欠であり、そうした地域の教育課題への貢献が当フォーラムに求められている。

### **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

本来ならば、人口の少ない共同体社会の当地域にあっては、児童のパーソナリティにまで踏み込んだ活動が期待できる通学キャンプを展開していきたいが、活動の財源が乏しい状況下では、費用負担の問題から、安価なコストで実施できるコンテンツ単体の日帰り型活動を継続的に展開することで、多くの児童の参加機会を確保していく。

また、他方で様々な伝承技能をもった地域の高齢者との円滑な人間関係づくりを今後も日常的にすすめながら、指導者の人材発掘に努めていく。

## 佐賀県

### (1) 事業概要

本事業が行われたすぎの子文庫が所在する神崎市は、佐賀県の東部に位置し、東は神埼郡吉野ヶ里町及び三養基郡、北は佐賀市三瀬村及び背振山地を隔てて福岡市、南は九州の大河、筑後川を挟んで福岡県久留米市城島町、西は県都の佐賀市と隣接しています。

地形は、城原川、田手川及び嘉瀬川の源流をなす背振山を最高峰とする北部の山間地域と、同河川が潤す肥沃な平野からなる南部の穀倉地帯とに分別され、縦に細長い形を成しています。

また、神崎市の人口は約 33,600 人弱、世帯数は約 10,500 世帯であり、1 世帯あたりの人数は約 3.2 人です。ここ 20 年間の年齢別の人口推移につきましては、老年人口（65 歳以上人口）の増加率は 63%と増加が著しいのに対し、年少人口（0～14 歳人口）については -28.9%と大きく減少しているなど、少子高齢化が急激に進んでいる地域です。

すぎの子文庫は、平成 8 年 3 月に神崎市在住の牟田昭一郎氏が「子どもたちが、のびのび遊べる森の中で、本に親しめる場所を作りたい」そんな思いから、開設した私設図書館であり、運営は母親たちがボランティアで担当、活動は毎週木曜日と土曜日に読み語りやエプロンシアターなど多様な活動に取り組み、近所の子供たちが多数集まるなど、子どもの読書推進に大きく寄与しています。

そして、すぎの子文庫は、「子どもの居場所」としても定着しており事業を行う上で自然環境・人的資源・周知度・読書との連携による新しい展開等様々な条件が良好であった。この地域で本事業を行うに当たり次の目的を掲げた。

それは、少子高齢化が進む地域において失われつつある子供の遊ぶ力を伸ばし、周りの豊富な自然に気づき主体的に遊ぶ子どもに育つきっかけを作るとともに、図書にふれる機会を作りバランスのとれた成長を促すことを目的とした。

この目的達成のため、すぎの子文庫スタッフと連携を取りつつボランティア 5 名スタッフ 3 名を確保し文庫の行事と整合性を図りながら、神崎市内全小学校児童約 2000 名に対する広報は神崎市教育委員会の支援をいただき実施した。

チラシの作成は毎月半ばに行い、教育委員会を通しての配布は月初め 1 週間前をめどに実施した。申込みについては事前申し込みとするも、当日飛び入り参加も受け付けるともに参加費無料と明記し、参加のハードルを下げた。

また開催日時を毎週末土曜日 10:00～12:00 とし定例化させ継続的に参加できる体制を作った。

### (2) 放課後活動事業のプログラムについて

ねらい

レクリエーション・ネイチャーゲーム・プロジェクトアドベンチャー・伝承遊びや読み聞かせなどの活動を通して、身近な自然に親しみ、友達との絆を深め、主体的に遊ぶ子ども

に育つきっかけを作ることをねらいとする。

**対象**

幼稚園児から小学校生徒

**実施アクティビティー**

月日	実施アクティビティー
9/8	ダルマさん・弟子のジャンケン・みんな鬼・フクロウとカラス・カモフラージュ・フィールドビンゴ
9/15	後出ジャンケン・グーパー・お地蔵さん大福食べた？・フープリレー・コウモリとガ・同じ物を見つけよう
9/22	後出ジャンケン・ジャンケン落ち葉集め・大きい葉っぱ・木の葉のカルタとり
9/29	ポイズンリムーバー・みんな鬼・かくれんぼ・木登り
10/6	後出ジャンケン・ポイズンリムーバー・進化ジャンケン・インパルス・ノーズ・私は誰でしょう・フィールドビンゴ・カメラゲーム
10/13	弟子のジャンケン・みんな鬼・フクロウとカラス・ノーズ・動物ヒントリレー
10/20	後出ジャンケン・グーパー・お地蔵さん大福食べた？・フープリレー・納豆川渡り
10/27	進化論・ヤートサークル・ジャンケン落ち葉集め・大きい葉っぱ・木の葉のカルタとり
11/3	ポイズンリムーバー・みんな鬼・かくれんぼ・かんけり
11/10	ポイズンリムーバー・インパルス・フィールドビンゴ・カメラゲーム・ドングリ笛作り
11/17	フクロウとカラス・ドングリ数当て・フィールドビンゴ・ドングリ笛作り
11/24	グーパー・私は誰でしょう・動物交差点・フィールドビンゴ・ごちそうはどこだ
12/1	進化論・ヤートサークル・ジャンケン落ち葉集め・大きい葉っぱ・木の葉のカルタとり
12/8	ポイズンリムーバー・みんな鬼・かくれんぼ・かんけり
12/15	パネルシアター・絵本読み聞かせ・クリスマスカード作り
12/22	フクロウとカラス・ドングリ数当て・フィールドビンゴ・ドングリ笛作り
12/29	グーパー・私は誰でしょう・動物交差点・フィールドビンゴ・ごちそうはどこだ
1/5	進化論・ヤートサークル・ジャンケン落ち葉集め・大きい葉っぱ・木の葉のカルタとり



1/19	ポイズンリムーバー・みんな鬼・かくれんぼ・かんけり
1/26	木登り・鬼ごっこ・フクロウとカラス・私は誰でしょう・動物交差点
2/2	木登り・鬼ごっこ・フィールドビンゴ
2/9	鬼ごっこ・かくれんぼ・カモフラージュ

#### 細部実施要領

ネイチャーゲームや一般的な子どもの遊びを主軸に様々な体験活動の手法を取り入れ、自然体験を通して仲間作りや遊びを通しての達成感の獲得、仲間との競争より協力を重視して指導した。また、子どもたちが継続的に意欲を持って参加できるように活動のルールは参加者の声を反映させながらその場で作り出したり、修正させて実施した。

#### 自然体験プログラム実施上の留意点

実施する上で特に留意した点は、すぎの子の文庫の自然をいかすことでした。それは、そこにあるいろいろな木々や草花そして木の実を使ってプログラムを作りました。

そして、安全上の注意喚起をしながら活動の合間にはそこにある、イチジクやムカゴをみんなで食べて味わう活動も入れました。

また、子どもが活動を持ち帰って出来るように、出来るだけ道具を使わない様に留意しました。

### **(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について**

地域内の大人の協力を得るためにどのような工夫をしているのか

地域内の大人の協力得るための態勢確立には至っていない状況です。これは準備期間がないままに開始され、時間の関係で地元教育委員会・学校及び受入れ施設との調整に留まってしまったためです。今後の対策を考えるなら学校との連携はもとより、PTA との連携も視野に入れて活動をする必要があります。

#### 指導者確保及び育成

地域のネイチャーゲームリーダーに呼びかけ参加していただくとともに、併せて受入れ施設側のボランティアスタッフにも参加していただき、人的資源の確保をしました。また、育成についてはネイチャーゲームのバディチェックシートを活用しその日の内に活動のフィードバックを行いながら問題点・対策処置を指導員全員で共有化を図りながら実施しました。

### **(4) 安全面への配慮について**

受入れ施設で考えられる危険な要因は、「転ぶ」「枝で遊んでけがをする」「水路に落ちる」「木から落ちる」など、甚大かつ緊急な対策の必要がある危険要因は考えられませんでした。

しかし、参加者の危険予知能力が下がってくれば、いかなる要因でも危険なレベルになることを考え、活動前、参加者に周囲を観察させどんなことが危ないか列挙させ、どんなことが起こるか想像してもらいました。

そして、そうならないためにはどうしたらいいのかみんなで共有化を図りました。しかし、活動を実施しているとややもすると守られない状況が生起することがありました、その時は一旦活動を中止して、みんなで考える時間を持ち理由を確認しました。こうすることにより、徐々に全員で安全に対する態度が浸透してきたようです。

今回の事業間、一件の不安全もなく終了できたのは、参加者の意識を常に高く保ってこられたおかげです。安全という状態はなく危険な状態にならなかった結果しかないと考えます。常に安全だったという結果を出し続けるために参加者の意識レベルを下げない施策が必要と考えています。

## **(5) 参加者、指導者の感想など**

### **【参加者の感想】**

前の週に木登りをしたとき、参加者が来るなり木に登り始めた、そして前より高く上がったかを得意げに聞いてきた。それを見ていた他の参加者も同じように木に登り得意げに聞くようになり、その木には順番待ちの行列が出来た。そして、お母さんから、「先週、家に帰ってから、庭の木にうれしそうに登って遊んでいた。以前は木には見向きもしなかったのに、登れたことが楽しかったみたいだ。自信になった様だ。」と聞かされた。

### **【指導者の感想】**

「参加者の自ら遊ぶ力はかなり落ちているようだ、しかしこの事業をつうじ子どもたちに様々な体験をしてもらうとき、その目に生き生きと輝いてくるものを感じる。この活動を積み重ねて体験することによって子どもたちの中に生き生きとした遊びがよみがえってくる手応えを感じるが、しかしあまりにも子どもたちは忙しく学校・塾・クラブと日々の生活が急がされている様だ。

## **(6) 本事業の成果、今後の課題**

年度半ばからの事業であったが、定期的実施することにより参加者も定着し自然体験活動による作用が蓄積され一定の効果が上がったと考える、しかし事業当初予想していた受入れ施設側との連携によるプログラムの広がりについては低調であり、なかなか進まなかった。しかし本事業参加後、文庫を訪れ、本を借りる等読書に対する興味を喚起する要因になった。

## **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

参加数は神崎市教育委員会をとおして地域の小学校約2000人の児童にチラシを配布

したが、低調で伸びなかった。原因は自然体験活動の認知が低いためと考えられることから今後は告知から開始まで準備期間を十分に取り、各地域でイベントを開催し地域の諸団体（PTA、子供会、学童）に十分に説明するとともに、参加者に動機付けを図り、各団体との協力態勢を確立するようすることが望ましい。



## 長崎県

### (1)事業概要

「自然楽校」は、子どもたちに自然に親しんでもらい、楽しく植物や動物への関心を持ってもらうことをねらいに開催した。

時代とともに生活スタイルは大きく変わり、生活に根付く自然のあり方も変わり、また子どもたちを取り巻く社会状況も変わってきた。自然と親しむことの少なくなった大人や子どもが、これからの地球の環境を考えるために地域で自然体験の機会を多く持つことは、自分たちの暮らす地域の文化、伝統を学ぶことにつながるとともに、その自然との関係性の変容を学ぶことができることから「より良い自然とのかかわりをもつ」という視点をはぐくむことができる。

こうした活動は持続可能な社会の形成へとつながっていくものであり、長崎ペンギン水族館子どもネイチャーゲーム教室での実践が大変意義深いものとなっていると感じている。

#### 実施日・時間帯

月に2回、第2・4土曜日 10:00~12:00

(上記を定例としてその他は季節に応じて活動を行う)

#### 実施場所について

長崎ペンギン水族館（長崎県長崎市）

この事業の拠点である長崎ペンギン水族館は平成10年3月に閉館した「長崎水族館」が多くの市民や全国のファンの署名や募金活動によって、平成14年4月に再オープンした。ペンギン水族館の周辺は住宅地で世帯数も多く、水族館は家族の憩いの場の場となっており、土曜日は子どもの入場料が無料なことから子どもたち同士でも遊びにくることのできる場所となっている。また小学校の授業で水族館を利用することもあり。子どもたちにとってなじみ深い場所である。

ペンギン水族館の中には里山の自然を模したビオトープ“自然体験ゾーン”があり、ここには長崎の在来種の植物が植えられ、地域ならではの古くからある自然を感じる事ができる。ここで感じる事のできる気候・風土は、衣・食・住をはじめとする私たちの生活と自然との深いかかわりを培ってきたものであり、地域の文化がうまれ传承されてきた自然の様子を見ることが出来る場所となっている。

#### 参加者数

30名

#### 募集・広報について

新学期に長崎市内の全小学校に配布。

#### 参加費

無料

## (2) 放課後活動事業のプログラムについて

2004年度からの子どもの居場所事業「地域子どもネイチャーゲーム教室」の一会場として「長崎ペンギン水族館子どもネイチャーゲーム教室」の取り組みを開始して4年が経過し「自然楽校」のプログラム内容も充実してきた。

ペンギン水族館内や自然体験ゾーンの海浜ゾーン・里山ゾーン・河川ゾーンと施設の特徴を活用しバラエティーに富んだプログラムとなっている。

### 2007年度「自然楽校」プログラム

4/14	水族館を探検しよう	4/28	自然体験ゾーンを探検しよう
5/12	苗床作り	5/26	ビオトープってなあに？
6/9	池の中には何がいる？	6/23	メダカ博士になろう
7/14	めだかの学校 ～解説発表会～		
9/8	昆虫はどこにかくれているのかな？	9/22	畑の土を作ろう
10/13	野菜の種をまこう	10/27	木の実の工作
11/10	草木染め体験	11/24	丸太切りと焼板細工
12/8	自然体験ゾーンの美術館		
1/12	野菜の収穫	1/26	冬の自然を再発見
2/9	ペンギン学習	2/23	紙すきで終了書作り
3/8	自然楽校のふりかえり		

大人がリードするプログラムばかりでなく、子どもたちに主体性を持ってもらうために6/9「池の中に何がいる？」メダカの観察→6/23「メダカ博士になろう」メダカの知識を知る→7/14「めだかの学校」解説発表会のように、子どもたちに来館者へメダカについて解説してもらうなどの機会を作った。

「木の実の工作」でも、作品を来館者に配ったり、小さな子どもにプレゼントをすると、参加した子どもたちは色々アイデアを出しながら積極的に作品を作ってくれた。

そのほか次のプログラムも行った。

\*稲や野菜を育て収穫し恵みを食する。

10/13「自然の中の種」



12/23「もちつき」



植物や昆虫・水の中の生き物観察を通して命のつながりについて学ぶ。

8/22「川の観察会」



9/8「昆虫観察」



暮らしと自然のつながりを知る。

11/24「丸太切り」



2/23「紙すき体験」



### **(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について**

スタッフはネイチャーゲーム指導員（CONE リーダー）を中心にすすめてきたが、ペンギン水族館のボランティアで興味を持って参加する方も増え、プログラム作成にも参加してもらえるようになった。またファミリー参加の保護者の方も、回を重ねるごとにスタッフを補助してくれるようになり、保護者の方のこの事業への係わりは、受動的から能動的に大きく変化したように感じられた。これは自分の子どもだけではなく、他の子どもたちへの目が意識が向けられるようになったということであり、子どもたちを見守る大人が増え、安全面の上からもとても助かった。

また、年間を通じた活動は魅力的なプログラム作成のためのアイデアをストックすることにつながり、教室としての実績の蓄積だけでなく、個々の指導員のスキルアップにも大きな効果があった。さらに“自然体験ゾーン”が里山の自然を模したビオトープであることから、季節ごとの自然を活かしたプログラムが可能となり、ススキ、竹、木の実を使ったクラフトや、種まき、稲刈り、脱穀などのその季節ならではの体験も織り込むことができた。こうした季節ごとに新しいプログラムを盛り込んでいくことは、指導員一人一人のもつスキルをしっかりと活かす必要があるとともに、一人一人が新しいスキルを身につけていく場ともなった。

もちろんスキルアップだけでなく、子どもたちとの関係性を築き、基本的な運営のための知識、態度を学ぶ機会ともなることから、指導員としての総合的な力を伸ばす機会ともなっている。

### **(4) 安全面への配慮について**

カマやノコギリなど刃物を使うプログラムを盛り込んだことから、道具の危険について伝える機会としても活用した。道具を使用するときの注意事項、使わない時の刃物の管理の仕方、また周囲への注意を怠らないことや、刃物を使っている人がいるときに周りの人も配慮をしないといけないことを伝えた。また刃物を使うは時には大人がついて作業を行うことをルールとして、子どもだけでは刃物を使わないことを徹底した。

フィールドの安全面は、子どもたち自身慣れたものであるが、それゆえに気がゆるまないうような下見を行い、無理にアクティビティを実践しない、フィールドを変えるなどの配慮を行った。またフィールドだけではなく、行き帰りについても配慮が必要であることから、子どもたち同士誘い合わせて来ることや、自主的な保護者の送り迎えを促した。

また暑さ対策も重要であり、水分補給を心がけた。

### **(5) 参加者、指導者の感想など**

今年度は同校の子どもたちが少なく、「自然楽校」を通してお友達になったり、お互いに持っている知識を教えあったり、年下の子どもの面倒を見たりと社会教育の場として有意義だった。



また個々のプログラムへの反応としては「稲刈りはきつかったが最後までがんばった」、「丸太切りがだんだん上手になっておもしろくなった」といったように普段の生活ではできない体験への興味と、最後までがんばる姿が見られ、野菜の収穫にはみんな夢中になって楽しんでいました。

保護者からは、「いろんな体験ができるのでもっとPRするべきだ」「学校に持っていけるプログラムもあるのでは？もっと多く子どもたちに体験をさせたい」「異年齢でしかも他校の子どもたちと仲良くなる機会になってよかった」「水族館に来ていろんなプログラムに参加でき、違った自然の見方や水族館の様子を見学できた」との感想がよせられた。

近年の子どもたちは感想を聞いても「おもしろかった」「楽しかった」など感じたことを言葉で表現するのは苦手のような様子である。幼稚な言葉による表現とほらほらに、子どもたちの表情や態度を見ていると生き生きと目が輝き積極的に活動に取り組む姿勢が見られ、子どもたちのエネルギーを感じた。日常の生活の中では、親も子どもたちの体験にゆっくり付き合うゆとりもないし、親自身も体験不足のために子どもに教えることもできないため、余暇の過ごし方も変わって親から子へ道具を使う技術や生活の知恵が伝わらなくなってしまった。親も子どもと同じ体験を共有することによって会話も増え楽しそうな姿を見ることができ、子どもとのかかわり方の重要性に気づいてもらうきっかけとなったと思う。

## **(6) 本事業の成果、今後の課題**

最初は子どものために付添いで参加されていたお母さんが親子で同じ体験をされている様子や、「自分が楽しくなった」とお父さんを誘って来られたりする姿が見られた。これには大人の自然体験がないことに気づかされた。また、「昔は草花や木の実で遊んだけど、忘れてしまっている。子どもとこんな遊びをしたことがない」と言われるお父さんお母さんがおられ、自然体験をしてきた大人も、親子で過ごす時間が昔とは違ってきており「子どもにも自然体験を！」と言っても、保護者がその必要性を感じてくれなければ子どもは自然と触れ合う機会を持つことができなくなってしまっている。

草木染め、竹細工、自然物クラフト、もちつき、野菜の栽培、お米の収穫など、自然と関わってきた私たちの文化を体験する機会をもつことができ、フィールドを活かして子どもたちに自然と私たちの生活とのかかわりと、その変容について感じてもらうことができたのではないかと思う。体験に裏付けられたこうした経験、学びがこれからの子どもたちの成長において良い糧となり、自然を大切にする心や、食べ物に対する感謝の気持ちが育っていくことを願っている。

また保護者がこのような事業の必要性を感じて関わってくれたり、子どもの成長に大切なこととして認識してくれることは、地域の教育力を復活させる力になっていく可能性がある。

### **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

2004年度子どもの居場所事業「地域子どもネイチャーゲーム教室」を始めるきっかけは、子どもたちが水族館に遊びに来ていたからである。

2007年度、本事業を継続していて昨年までと大きく違うと感じることは、子どもたち同士で水族館に来る人数が減ったことである。子どもたちが自由に外に出て遊ぶことができない社会情勢が影響しているのではないかと思われる。子どもたちとの会話で「男の子は家でゲームばかりしている」というのは以前からだったが、近頃は小学校高学年の女の子でも携帯電話によるメールを行っている様子も目立ってきた。コミュニケーションの取り方が大きく変化してきているのを感じる。

地域と保護者がもっと近づき一緒になって子どもの成長を見守る地域作りを確立していくことが子どもの健やかな成長に必要なことと確信している。人とのかかわりを面倒に思う風潮は地方も変わらないが、地域社会の教育力の復活を願いつつ、次年度への活動につなげていく予定である。

次年度も年間計画を立て、継続的にプログラムを実施していく予定である。自然や生き物とのふれあい、自然のしくみや生命の不思議を発見する教室として「自然楽校」を開催する。生物の観察会や野菜作り、自然のものを使った工作など、1年間を通しての自然体験活動プログラムを組む。また、活動の成果を来館者に披露する発表会を定期的で開催し活動報告をすることで、こうした「自然楽校」の取り組みをアピールしていきたいと考えている。

## 沖縄県

### (1) 事業概要

沖縄における本事業は、うるま市立南原小学校において開催した。

南原小学校で開催した理由は、第一に当校に赴任された比屋根教頭先生の依頼によるもので、平成18年度まで開催した「CONE 地域子ども教室」の際も前任校である沖縄市立宮里小学校で私どもの自然学校が行っていた関係からだった。また、うるま市立南原小学校では、前年度までの「地域子ども教室」を父母を指導者として開催していたのですが、今日の「放課後子どもプラン」では、とても忙しくて、これ以上対応できないということで、開催しないことを決定したようです。しかし子ども達への教育的効果と子ども達が楽しみにしていた事業であったので、学校としては何とか、今回の事業を開催できないかと、CONEが本事業の開催を決定する前から、私ども事業所の方に相談されていたからだ。

実施日については、学校側と相談の上、毎週金曜日は、5時間目で授業が終了するので、放課後活動に適した日であることから、毎週金曜日15:00分から17:30まで行うことを決定した。

参加者対象は、4年生以上とし、チラシを作り、各クラス担任を通じて配布した。その結果、4年生7名、5年生2名、6年生16名 計24名の参加となり、参加対象の子供たちの父母に集まって頂き、学校長、教頭同席の元にオリエンテーションを開催し、放課後子どもプランの内容とスケジュール、プログラム、そして指導方針までを話し合った。

特に指導方針として、スポーツにルールがあるように、遊びや自然体験の中にも明確なルールや注意することがあり、そこをしっかりと学び、教えることが重要であり、教育効果もそこにあることを説明した。

父母からは、「しつけ」に期待する意見などが在ったが、プログラムを展開していく中で、スタッフが高圧的に教育的指導するのではなく、昔遊びやゲーム、そして自然体験活動等の体験を通して、子ども達が自ら気づき、理解し、学びにつなげていくことが重要であり、スタッフはそれをフォローし、アドバイスをすることを指導方針にしていることも理解して頂いた。オリエンテーションの場で正式な申込み受付と保険料の徴収を行い、放課後子どもプランのスタートとなった。

尚、参加費についてはその日のプログラムに必要な時に徴収することにした。しかし実際には、前年度まで「子どもの居場所づくり・地域子ども教室」で、使用してきた用具や教材が在ったので、それを活用し、子ども達の負担は、ほとんどなかった。

### (2) 放課後活動事業のプログラムについて

今年度の放課後子どもプランのプログラムは昔遊びと自然体験等を中心に計画をした。特に昔、私たちがよくやった遊びは集団で行う遊びが多く、最近の子供たちの遊びのようなファミコンやテレビゲームなどのような1人遊びは無かったので、集団遊びの種類は豊

富でした。

S けん、王様とり、宝ふみゲーム、そして鬼ごっこの丸鬼・十字鬼等盛りだくさんで、勝敗を決める要素を含んでいるので、子ども達もすぐ夢中になった。遊びを教える中で特に注意したのは規則・ルールを守ることの大切さだった。集団遊びの中で、ルールを守ることの大切さが子ども達に社会性をはぐくむことになることをスタッフ全員が共通認識をもって指導していきました。ルールを守らずに自分やチームに有利な状況を図ろうとしたときには、すぐに遊びを止め、注意を促しそれでも守らなかったときには、きつくしかることもあった。そしてルールが守られないまま、遊びを続けたら楽しいか、楽しくないかの確認を子ども達同士に話し合いをさせたこともあった。

また、けん玉やこま遊びなどは、個人の技術をアップさせることで楽しみが増えていくことを覚え、技術力向上のためにも努力することを学んだようだ。

それからビー玉やマンカラの遊びでは、勝ったときのうれしさ、負けたときのくやしきなど、子どもたちが素直に表現し、夢中になっている姿は昔も今も子供は変わらないものだ実感した。ひとり遊びの中では、このような他人との関係作りにおける大切な喜怒哀楽の表現は育たないであろうと思った。

それから、学校側の理解もあり、校庭の隅で火を使ってよい場所を確保し、火のおこし方、育て方、そしてその火を使って、ホットケーキやマシュマロを焼いて食べるアクティビティは、子ども達に大人気だった。そして火の大切さと危険性を自分の肌で感じ、理解する良い機会であったと思う。

また、週末には親子で自然体験をするプログラムを作り、親子で自然体験する喜び、そして楽しさを実感してもらい、現代に残された自然をどのように守らねばならないのか、そして、なぜ守っていかなければいけないかを気づいてもらうための重要なプログラムだった。リバートレッキングでは、大人も子どもも初めて体験したという人もいて感動している様子がこちらにも伝わり、楽しい一日だった。また植樹を体験した子ども達は「自分で植えた木が大きくなるのが、待ち遠しい」と話していた。そして、地球の温暖化問題の話しにも真剣に耳を傾けていた子ども達の姿が印象的だった。このように週末活動で、学校外に出て行くプログラムも、学校側は案内文書の配布・連絡を積極的に協力して頂き、また、週末活動の自然体験勝活動は、写真などを学校掲示板などで張り出し、学校全体にわかるように報告して頂き、大変うれしく思った。

今回は、4年生以上が対象だったが、掲示板を見て低学年から自分たちも参加したいという声が、学校長や教頭先生にたくさん届き、うれしい悲鳴をあげたと学校長から報告があった。

### **(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について**

自然体験活動をするにあたっては、CONE リーダー認定のスタッフが指導にあたった。前年度までの「子ども居場所づくり・地域子ども教室」の際にCONE リーダー養成をスタッフやボランティアスタッフにしていたので、今回もその時の大学生が指導者として

手伝っていただきましたので、大変助かりました。

安全面に関しての配慮は、上記に書いた通り、MFAの指導をスタッフに行っていたことと、自然体験では、事前のフィールド調査などを行い、また危険生物に対する対応などは、CONEリーダー養成の時に、教えていたが、改めて復習を行った。

#### **(4)安全面への配慮について**

スタッフ全員にMFA(メイディカル・ファースト・エイド)の資格も取得させて、まさかの時に、対応できるようにしていた。自然体験では、事前のフィールド調査などを行い、また危険生物に対する対応などは、CONEリーダー養成の時に、教えていたが、改めて復習を行った。

#### **(5)参加者、指導者の感想など**

##### **指導員A**

指導員として感想は、最初の頃は、昔遊びのルールを覚えることや守ることに戸惑っていた様子も見られましたが、慣れるに従い活発になり、男女間も仲良く、集団遊びに取り組むようになった。自分の小さい頃の体験から言うと、まるで昔の子ども達が現代にワープしてきたような感じがして、全然、違和感が無かった。やはり子どもはいつの時代でも同じであり、適切な環境を与えれば、しっかり育っていくものだと改めて、感じた。やはり大人は、もっとしっかり子供の環境づくりに真剣に取り組まなければいけないと思った。

##### **指導者B**

指導者として遊びを教えることと一緒に仲間つくりと場をつくる事に気をつけて教室を開催した。やはり遊びの中に入れない子供達は、最初指導員の側から離れなかったり、いろいろと悪さをして、気を引いたりといろいろあった。そのような子どもたちと遊びながら他の子ども達とのコミュニケーションを取れるようにしたりするのもスタッフの役目であると考えている。登録した子どもたちが毎週多く参加し、来年の開催を期待するのを聞いて、子ども達もそのような場所が常にあって欲しいのだと思う。

##### **学校長**

本校は、平成12年度に世界遺産に登録された「勝連城趾」の裾野に広がる平坦部に位置し、中城湾に面した、海や山に囲まれた自然の景観に恵まれた静かな農業地帯にあります。保護者や地域の学校への関心は高く、地域と共に歩む学校作りを中核に子ども達の豊かな心と確かな学力の育成を図っています。

子ども達は純朴で、素直で、活気に満ち溢れています。たが、近年の情報機械の浸透から、本地域の子ども達でさえ、学校から帰るとテレビやゲーム等で、過ごす子ども達が増え、放課後や週末を子ども同士で遊び回ることも少なく、人との関わりや自然との関わりが薄れてきています。

そこで、本校の子ども達を異年齢で組織し、自然とのふれあい体験活動や昔遊び等の豊かな体験をさせることによって、心豊かでたくましい子どもをはぐくんでいく趣旨で、「サンゴとブロッコリの森自然学校代表の中根忍氏に放課後の体験活動を依頼し、「南原トムソーヤ探検隊」がスタートしました。

毎週金曜日の放課後や週末には、昔遊びやネイチャーゲーム等、週末には川遊び等の自然体験の事業を進めてきましたが、子ども達からは、「昔遊び楽しいね」「昨日の川遊びチヨー楽しかった」「火をたくって難しかったよ」など、活動の楽しさをクラス等で報告していました。子ども達は、様々な体験や人のかかわりの中で、思いやりの心や行動力・協調性などを身につけると共に、自分の可能性、自己有用感を満喫できたものと飲んでいきます。そして、今回の活動は、子ども達にとってかけがえのない宝物として残ることになると思います。

未来ある子ども達を社会全体で、はぐくんでいくことを目的とした本事業は、まさに時期を得たものと確信しており、本事業が本校で開催できたことを心より感謝申し上げます。

また、本事業の実施にあたり、「サンゴとブロッコリの森自然学校の中根忍様、スタッフの皆様には人かたならぬご尽力を賜り、感謝申し上げます。

尚、本事業を沖縄で開催して頂いた NPO 法人自然体験活動推進協議会様には、お礼と共に、これからも、日本の子ども達に、自然体験を通じた教育活動に御尽力されんことを期待します。

#### 子ども達 (アンケートより)

- ・初めて滝に行ったとき、寒くて深くて怖かったけれど、いい体験になりました。
- ・マンカラはやったことが無い遊びだったけれど、今の遊びより楽しかった。
- ・初めて、マンカラをやったとき、とても弱くって、難しかったけれど、家で妹に教えて喜んでもらえて嬉しかった。負けたり、勝ったり、悔しい思いや、嬉しい思いをしてだんだん強くなり、マンカラ大会では、優勝してうれしかったです。
- ・滝から飛び込む時は、怖かったけれど、飛び込んだ後はうれしかったです。
- ・割り箸でつぼうを作ったとき、とてもよいアイデアがうかび、楽しかったです。
- ・キックベースで走りまくったので、くるしかったけど、勝ったときは楽しかった。
- ・みんなでたき火をして、ベッコウアメを食べました。自分で作ったので、少しこげていましたが、美味しかったです。煙が目に入っていたかったです。

#### (6) 本事業の成果、今後の課題

今日の成果としては、やはり参加した子ども達が、異年齢の集団の中で、いろいろな体験活動を重ねながら、ルールを守る大切さや、チームワークの大切さと素晴らしさそして自然体験活動で学んだ自然の楽しさと保護保全の大切さを学んだことだ。

特に、リポートレッキングで滝つぼまで行ったときの思い出は、みんなの心の中に、深くきざまれているようだ。またその報告をかねた学校掲示板の写真などをみて、他の子供

たちも、参加したいと学校長のところへ訴えてきたそうだ。

また、一緒に参加した父兄たちからも、自然体験の素晴らしさを改めて、実感した様子だった。それから、今回の放課後子ども教室では、スタッフ以外に教職を目指す大学生等も手伝ってくれ、彼らのとつても、何よりの教育実践の体験の場ともなり、体験活動と体験学習の重要性を学び、彼らなりの成長もあったようです。

今後の課題は、教職員の放課後活動の参加が無かった事と、父母達の共働が多いので、放課後活動への参加がやはり無かった事だ。しかし、週一回の活動であれば、しかも2時間程度の活動時間なので、協力参加は可能だと思う。よってもっと学校・PTAとの綿密な話し合いをして、協力体制を整える必要があり、それがこの活動の継続のためのポイントになると思う。

### **(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて**

最初に申し上げたとおり、ここ南原小学校は、平成18年度までは、教育委員会から「地域子ども教室推進事業」をPTAで委託を受けて、週3回ペースで活動をしていましたが、プログラムの編成から実際の活動に至るまで工夫、努力したようですが、疲れてしまい、今年度からの事業は、取り組まないということになり、私どものほうに依頼があった次第でした。前回までの取り組みを振り返ると、どうも身の丈にあった活動ではなく、無理をしたのではないかと思われる。

週一回ペースでローテーションを組立て、学年や人数をある程度の制限をすれば上手く対応できるかと思われるので、3月に再度、父母達と話し合いを持ち、継続する意義と、特に子どもたちの成長に不可欠な活動であることとこれまでの集団あそびや自然体験活動による、子ども達の変化を感じている、我々スタッフがストレートに伝え、学校への再度の協力をお願いし、プログラム作りは、我々が協力するような展開を、図って行きたいと考えている。

具体的には、1年～3年の父母、4年～6年の父母に分けて、指導グループを編成する。どうしても低学年と高学年では体力差があり、同じ体験活動がやりにくい場合があるのだ。それからプログラムは今年度、我々が展開したアクティビティを自然体験活動、昔遊び活動（野外編・屋内編）ネイチャーゲーム・PAゲームそしてドッジボールやキックベースボールなどを週ごとに振り分けて、大人も一緒に参加して楽しむことを基本に先生方の参加もお願いしたいと考えている。

また何をやるにも安全対策が重要になってくるので、地域の消防署に依頼し、父母・教員対象が救命救急方を学び、私のほうからは自然体験活動の安全対策（危険生物への対処法と救急法）などを伝えること、それから保険に関することもしっかり学ぶ機会を作ってスタートできればと考えている。基本的には、PTA中心のボランティア活動を考えている。